

## 『キリスト教信仰における不屈の情熱』

— F. ライヒスシーゲル (脚本) および M. ハイドン (音楽) による日本を舞台とした劇。高山右近と豊後のティトスについてのイエズス会演劇レパートリーにもとづく1774年上演のザルツブルク・ベネディクト会演劇—(続 I)—

*Der standhafte Eifer im Khristenthume – Ein Japanesenspiel von F. Reichssiegel (Text) und M. Haydn (Musik) nach dem Jesuitendramen-Repertoire zu Takayama Ukon und Titus von Bungo, auf der Salzburger Benediktiner-Bühne im Jahr 1774 (Folge I)*

嶋田宏司 (Hiroshi Shimada)  
Detlev Schauwecker

### 目次

戯曲の様式について Über den Stil des Dramas — Shimada p. 191  
本文日本語訳 Japanische Übersetzung des Dramas — Shimada p. 194  
ドイツ語原文 Abdruck des Originals — (Schauwecker校閲) p. 216  
あとがき Nachwort — Schauwecker p. 241

### 序文

戯曲『悲劇、不屈のキリスト教徒、ティトス』の  
テキストの様式について

嶋田宏司

戯曲『悲劇、不屈のキリスト教徒、ティトス』(Titus, der standhafte Khrist, in einem Trauerspiel) は五幕韻文悲劇である。このように典型的な古典主義の様式に基づいていることは、前文に添えられた「この劇の舞台は、日本の首都であり帝都であるメアコン。物語の筋は正午前に

始まり、夕方まで持続する」という指示からも明らかである。ここに古典劇の規範である、三単一の法則に従おうとする態度が明示される。しかし、場面の統一は果たされていない。各幕は宮殿の前庭、寺院、庭園、居間、宮中の大広間という具合に移動している<sup>1</sup>。また、悲劇と銘打たれているものの、英雄ティトスは奸計に落ちて迫害されるも、王の危機を救ったことで殉教を免れ、信仰を容認された上、摂政にまで推挙される。したがって、実質はトラジ-コメディである。

第一幕第一場で凱旋帰国したティトスは、ショウグンサマの御前に、謀反を企てた王の弟の生首を鉢に入れて、誇らしげに差し出す。いかにも血腥い情景を好むバロックの趣味が冒頭より劇的に表明されているものの、その後の幕においては控えられている。そこではバロックの対極にある古典主義の抑制が働いている。その例としては、第二の大逆である近衛のモロドンと侍医ヤクイン一味の暴動の始終が、ツミコンドンのレシ(注進)によって、また、この者たちに操られる法主シャルンガの負傷が、ティトスのレシにより報告される場面があげられる。そして、捕らえられて王の前でくずおれるこの法王の最期においてバロック性が復活する。こうした慎重な騒乱場面の回避は、抑制と均衡を旨とする古典主義の作劇法には必要であるが、武勇伝を物語の筋とするだけに刃傷沙汰は不可避である。その野蛮行為を異国の侍に託していることは、古典主義の拘束から逸脱するための良い口実となっている。

台詞は12音節の6押韻で構成された詩行であり、対脚韻をなす。したがって、脚韻は別としても、言語表現においても作者は古典悲劇の形式を踏襲しようとしており、高踏な隠喩によるレトリックも随所に見られる(「いと高き譽の港にありてなほ、なにゆえ出帆をためろうておわされる」)。しかし、その一方でこの品格を落とすような俗語表現が見られる(「神祖なんぞの話はやめたまへ」)、高揚した調子はつねに俗調へと下げられようとしている。さらに平板な平叙文が随所に織り込まれるが、この点に散文的言辞に価値を見出そうとする現代的な感覚が反映している。これらの文はすべて押韻に値する内容の有無にかかわらず、無理に詩句

---

1 編集の都合上、献辞や口上、指示など本文以外の資料は、最終回に一括して掲載される予定である。

と同様に押韻され、形式的な音韻の体系に組み込まれている。このことは、この劇を演じた神学生が修辞学や統語論を専攻していたことを考えれば納得がゆく<sup>2</sup>。学業の総仕上げとして、古典語風に書かれたドイツ語の台詞を朗誦して見せるわけである。それゆえ、舞台上での台詞回しは、話者の心理を直接表出する現代的なリアリズムのやり方ではなく、音響を重んじる詩歌の朗詠のようなものであったと考えるべきであろう。このような韻文の形式は、劇場の来賓である大司教に献上するための格式を保証しているし、なにより英雄叙事詩の体裁を保っている。

この作品の文芸史的意義は、古典主義、バロックという一世紀以上昔の様式が神学校という特殊な場において尊重され、日常語の使用という新しい傾向をも取り込みながら、東方の奇談が内容豊かに演じられたことである。また、宗教劇であるにもかかわらず、ミステイックな現象が表現されていないことは注目に値する。キリスト教徒ティトスをクライマックスで救うのは、超自然現象である天の御使いではなく、異教徒の王である。このショウゲンサマは機械仕掛けの神と見ることができる。王は、姦策と弾圧に耐えた臣下の克己する姿に打たれて大赦を決意する（「そなたが、わしの目にもそなたの目にも見えぬ神につき、忠義をかように保つとあらば、一わが身にも何か益があることぞ」）。つまり、倫理と実利的動機が人物を動かしている。このような筋の解決法は、作品が啓蒙主義の精神をすでに通過していることを示す。ひたすら意志の力によって自己の救済を図ろうとする武士の姿に、新時代の信仰の理想が重ねられている。

---

2 この戯曲の制作および上演に関する諸事情や、歴史的社会的背景については、シヤウヴェッカー氏の解説を参照のこと。

Detlev Schauwecker (嶋田宏司訳)

悲劇、不屈のキリスト教徒ティトス  
[フローリアン・ライヒスシーゲル作]

嶋田宏司 (訳)

[劇の舞台は日本の首都であり、帝都であるメアコン。筋は午前が始まり、夕刻まで持続する。この悲劇全体の音楽は、宮廷付き音楽監督ヨハン・ミヒャエル・ハイドン氏による。]

[登場人物]

キリスト教徒の日本人

ティトス・ウコンドン。

マルチアル、長男。

マッテウス、次男。

シモン、三男。

クララ、ティトスの妻。

クシャンガ、武士の長、またティトスの腹心。

ティトスの一族郎党 (キリスト教徒)。合唱隊よりなる。

異教徒の日本人

ショウゲンサマ、帝。

シャルンガ、宗教界の帝、法王。

ヤクイン、帝の侍医。

ゴモルドン、近衛の長。

ツミコンドン、クララの兄。帝の腹心の家臣。

イエモンドン、老中、帝の枢密顧問。

モロドン、老中頭、帝の腹心の家臣。

近衛の武士たち150人。]<sup>3</sup>

---

3 以上は1774年ザルツブルクにおける初演時のプログラムからの抜粋。

## キリスト教信仰における不屈の情熱

### 第一幕<sup>(a)</sup>

#### ティトス・ウコンドンにたいする帝の寵恩

##### 第一場<sup>(b)</sup>

シヨウグンサマ、ティトス・ウコンドン、モロドン、イエモンドン、  
ゴモルドン、クシャンガ。

ティト：シヨウグンサマ、万歳。そは仇敵の勝者なり<sup>(c)</sup>。天はこのお方を、衆の幸福のために守護し給ひけり<sup>(d)</sup>。

シヨウグ：友垣、このシヨウグンサマはそちにも幸あれと願う者。近う寄れ。わしを抱いてくれ。わしもそなたを胸に抱こうぞ。

ティト：殿、それがしはただだ主上の僕にて候。これなるご寵愛は過ぎたること。

シヨウグ：そなたはわしの友なり。何ぞ下僕であろうか。わしの胸にあっては、最高の友垣ぞ。そなたのわしに寄せる忠義にも、慈しみにも、わしはしかと報いることができようか。

ティト：それがし、誓言（せいごん）立てける務めが強いた課題を果たしたまで。敵をことごと滅ぼし、得られた勝利は、それがしでもさだめでもなく、ひとえに神、いかづちより宣旨下され給ふ、偉大なる神より賜ったもの。星辰をはせ、物づくり給ふ御手の一振りでの世を震わせ、光の脂粉もて荘厳し給ふ、その御心は量りがたし。また、もの脅かし、変じ、さらに被造の物を導き給ふ。

殿、このお方もまたこの一事をなしとげられました。なにとぞご感謝くださりませ。このお方は、戦勝の冠を分かたれ、敵の足元をゆるがせ給ふ。その御手からは、勝利、または敗北が下され候。

シヨウグ：良くぞ申した、ウコンドン。わしも神々の手で衆生の業を試すといふ、

---

(a) 朝廷の前庭にて。

(b) 勝利を吹奏する兵の一団と落ち合った後に帰還したティトスを、帝は前庭まで迎える。

(c) 兵たちも唱和する。

(d) 帝は彼のもとに歩み寄る。

さおばかりのことは存じておるが、慈悲滴るばかりにあふれ、われらが上にご利益を得させ給ふ御手についても、もちろんのこと。かしこまる心地は当然なり。そなたは神祖(かむおや)たちのことはよく考えていようが、わが身については、なおざりにしておるからのう。よしんば、人間衆生をほむるとて、何ぞ敬神にもとらん。神祖たちは、われらを教え、安寧に導いてくれよう。これらは、賢しき神祖の手が安泰の手立てとて、われら総領に得させ給ひけり。大きな霊により、神は大きな業をなし給ふもの。

さて申してくれぬか、わが仇(あた)、わが弟はいかに。彼奴は生き延びておるのか。それとも黒々し魂は、からがら逃れ出でたか。そちが癪めとったか。それとも慌てて屋敷へかへりおったか。あらためて奸知めぐらし、あらたに衆をたのむため。

ティト：おん帝、そうではござりませぬ。ご心配召されますな。敵はすでに奥つ城に。おん身には指すら触れられますまい。これクシャンガよ、証しに首をもてまいれ<sup>(a)</sup>。

ショウグ：そちの口から何をか聞きつらむ。もっとさやに申せ。わが弟は死んだといふか。たれが打ち懲じた。いかな猛々しき武者の手から、この安堵を得たものか。

ティト：弟君の血を、刃にて撒き散らしたるは、それがしにて候。おん帝、御覧じられませい。荒々しき霊の苦悶のあとが、この首に残っております。烈しい怒りがなむ、息もつかせず、地獄へとすっかり逃げ去ってしまうようにと、それがし故より載ち落として候。もはや彼が盲いた誇りも、主上の脅威ではありますまい。

ショウグ：はて、何を見ているのであろう。一わが不倶戴天の敵はここに、これほど小そうなりおったか。これはまさに弟の首。一増上慢め、わしにはうぬの荒くれた性根が、蒼白うなった額にしかと見えようぞ。わしがうぬと不当にも、ひどく争ったか。哀れな奴よ、たとい首尾調べて、国からわしを追いやることにならずとも、うぬの惨めなごまに、わしは嘆いたことであらうて。ここにうぬが血は注がれけり。

この不実の者め、これなる一件は、うぬが因縁に帰すべき。悪徳の憤怒に安堵なく、張本人をこそ返り打たん。一去ね、恐ろしきもの。われより杖、国、御座を奪つてみよ一去ね、うぬが塵泥(ちりひじ)にねむるがよい。

ティトスに向かい：友垣、いかにせば、そなたの忠義にかなった恩を返すことが

---

(a) クシャンガは謀反を企てた弟君の断ち落とされた首を、胸飾りとともに鉢に入れて持ってくる。これを帝に見せる。帝はこれを検分し、少し話しかけた後、器に戻す。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

できようぞ。そなたは弟を討ち、帝のたすけとなりけり。そなたが果たした弟の成敗により、わが心、そなたを弟とて、いとほしと思うようになった。左様、末永くわが一番の弟であってくれ<sup>(a)</sup>。近う、大切なウコンドシよ。これなる飾りは値せぬ弟がつけていたもの、わが手づから、愛情の徴に取れよかし。

ティト：それがしに恵み給ふ御温情の、はやる御心はいかにも過ぎたまひけり。殿、これではいかにも過分に候。

シヨウグ：さにあらず。いかにもこれはひいきであろう。だがなう、この感謝の気分と、そなたが貴い忠義こそは、そなたをこれなる誉れにもっともかなった男にしていようぞ。まだそなたが望むものはないか。かまわぬ、申せ。

ティト：主上、それがしは、殿がわれにその御好意を手向け給ふゆえ、ご恩に報いたまで。わが務めとて、殿のご安泰にとりてよき事がなしえるならば、わが身をもっとも幸せに思し候。

それがしは、さる御法をもっております。して、この言葉がわが身に染み入り、おん帝に終生の忠義を尽くさせて候。この御法からは、たとえ贈物、死、苦痛ですら、それがしを引き離すことかなわじ。殿、おん身とおん身の律法のため、わが血管の血をすべて注げ、と御宣旨くだされませい。

シヨウグ：では教えてくれぬか。そちの願いの本領はいづくにやある。

ティト：殿、キリストの民どもに御温情を。

シヨウグ：やれ、なんとしたこと。(かようなこと耳にせば、わが胸も震うことよ) ああ、そちの言葉には、気色を損ねたぞ。よいか、新しき教えが、この国に、国の法にもたらされてはならぬ。わが神祖を蔑するものは、帝の朝恩にふさはしからず。されば、わが身可愛と思うなら、キリストの民どものことは口をつぐんでおけ。気を確かに保て。理性を求めよ。わしとて、そなたの願いは聞き届けてやりたし。そなたはわしを、また他人をも不満に思わせたくはないであろうに。なれも没落は望ままいて。なれば、キリスト信仰のことは、語るな。よしわしが、気分のよいときがあり、そちに誼を抱こうとも、ひとたびわが国の神祖の勤めを怠れば、わが情けも消つ、と思せ。一いかなること、そちもキリスト信者か。なんと大きな辱め、不名誉ならむ。そちほどの男を、このようにちいそうしてしまうものよ。

わしの諫めにまつらへ。自ら落ちぶれるようなことはすな。わしの言葉を聞き分け

---

(a) 彼は弟の胸飾りを手に取ると、これをティトスにつけてやる。

よ。正しき諫めをいれ、よりよい願いを申すべし。体面を保ち、そちと一族の身を案ずべし。—これですんだとしよう。わしはなう、なれのことを思うておるのじゃ<sup>(a)</sup>。

## 第二場

### 前出の者たち。

テイト：もっと良いものを望め、と仰せられるか。それがしが願い奉ったことよりほかに、いかに良きものを望みうべき。

ゴモル：いと高き誉れの港にありてなほ、なにゆえ出帆をためろうておわされる。ウコンドン殿。主上の御寵意は、われらにさきはひもたらさんこと、そなたが示してください。さても、時機を逸らし給ふな。そなたの小舟はかくも順風満帆、荒まし潮路のひとつとてなし。

テイト：まさにしかり。そなたの譬う、追い風と朝恩、まことにうまく誉むらるべき。この世になんぞ、人の親切以上に権勢とたばかりの移ろいを強く感じるものがあるぞ。主御身は御寵意の不断と発心を思したまへり。主上は、身共にこの世の短かきさいはひを告げたまひけり。だが、それゆえにこそ、永久に続くべきさいはひは落ちん。主上はわが身を案じ給ふも、それがしは靈魂をなむ案ず。まことによく御案じ下さる。ただあまりに地上のことばかり。

イエモ：(勝者の喉もとからは<sup>(b)</sup>、意気高き声が洩れようぞ。

モロド：たわけたこと。息巻いておるわ。)

テイトスに向かつて：勇者よ、よし不心得にも、公の御厚情にさかろうても見よ。それこそ悪しき振る舞いになろうぞ。

テイト：何ぞ悪し。身共は、神が堪えがたきものを蔑し、それがしを悪性に導くものを軽んじるまで。

モロド：悪、とはいかに。これが神祖の前で悪と申すか。神祖は、われらに君公への畏敬をすら忠言し給ふもの。

イエモ：御法、またはわが神祖の教えは、帝を神とて敬ふべしと、論してはおらぬか。左様なことはあるまい。それゆえ主上がそちを悪くし給ふなど、いかにおこりえようぞ。

テイト：なんと。このあやまてる法なれば、うつろに莊嚴して人間衆生を神にも

---

(a) 彼は近習とともに宮殿に去る。

(b) モロドンに向かつて。



『キリスト教信仰における不屈の情熱』

祭りあげようぞ。まことの本性から、神がおん自らのために選りたまひし、誉れさへ奪おうぞ。

モロド：(なんと厚顔な物言ひか。なんとあつかましい口が、悪し様に語ることよ。

イエモ：彼奴は、われらに憎しみと不敬の心を、あからさまにしておるわ。さうして御法を払いやるつもりぞ。

ゴモル：友よ、とくと考えてみよ。主上の御温情がなむ、さうした驕りのいとはしき道を通らば、いかに易くお怒りにとたち返ってゆくものか。君公は神祖への不敬を、見過ごしたままではおられぬぞ。何せ、同じく殿も軽んぜらるゆえ。

ティト：神祖なんぞの話は止めたまへ。それだけ見れば人間の作れる神。悪業、欺き、たばかりがうたひあげしもの。かくも神様があまたおわすれば、御力もちいさいぞ。身共がこの阿呆をあふり、われにいくさ挑みさせようぞ。さほどに力強ければ、それがしに天誅を下せばよい。主上は、それがしが禄をも省みず、忠も義も慈しみからも離れたなど、何ぞ耳に入れ給ふ。さにあらず。それがしは帝をかしこまり、何よりお慕い奉る。身共は神とはなにか帝とはなにか、しかとわきまえておる。

天主からはわれらの心と本性が流れきたる。何者にも先んじて、服従と忠誠と榮譽が捧げられるべし。

天主にはあらゆる軍団から、また民から、童のごとく無垢な崇拜がなされねばならぬ。その次に、この俗世にてわれらのもて第一位を占め給ふ、おん帝がつづかれよう。わが御法ではこのように定めておる。

よしんば帝が身共に、慈しみではなく、怒りを覚し召さるとも、吾が血はすでにおん帝に捧げられていることを知れよかし。

帝は欲し給ふごとくに罰を下されようが、このわしは決して忠誠を破りはせぬ。わが御法が命ずるところは、上の方々をたといそのものが罪科に値しようとも上から下まで敬うべし、とぞ。帝にどうかお伝え願いたい。わが忠誠は不変なり、と。だが是非このことは付け加えておかれよ。主上の為ならば喜んで流せるこの血潮、わが御法のため、天主の為とあらばいっそう喜んで流そうものを。

ゴモル：そなたがかくも強情であるとは、わしの心が痛む。そなたの心が揺るがぬことが、わしを驚かす。

ティト：しかと聞けよかし。そなたの痛みは他にとっておかれよ。そなたが嘆ずる、わが信心をお許しください。痛みと感嘆は紙一重、それがしにもそなたにもなんの益やある。

ゴモル：はなはだわしを悩ませるは、わしには救ってやれぬということじゃ。しからはご免<sup>(a)</sup>。

ティト：これクシャンガよ。

クシャ：お呼びでござりましょうか、総大将。私めはこの通り、おん大将のために控えております。

ティト：もののふが、戦勝の貴き実りである憩いを存分に味わうようにせよ。皆の衆、栄誉の徴を獲物とともに、家に持ちかえるが良い。

たれひとりとして、秩序を乱し法を犯し、(だが自らの務めをないがしろにすることはあいならぬ。)風儀を踏みにじることはあいならぬ。

クシャ：おん大将、万事はそなた様の下知のままに。お疑いめさるな<sup>(b)</sup>。

### 第三場

ティトス。脇にはモロドンとイエモンドンが控える。

クララ、マルチアル、マッテウス、シモン。

クララ：ああ、またとなきわが背の君。わがなぐさめ。こちらへお越し下さりませ。あなうれしや。そなた様に見ゆるとは、なんとという喜びがわたくしをとらえることでしょう。

マルチ：父上、お帰りなさいませ<sup>(c)</sup>。

マッテ：お父様、お姿を拝見できてまことに満足でございます。

シモン：涙よ、わが忠考のしるしに流れよかし。父上、このシモンを愛しと思されるなら、どうかわれに分かるようにして下さい。その手に口づけをさせ給え。

ティト：息子達よ、そなたらは価値ある暮らしの保証なり。この父にとって最上のあやなす飾り。信心がわしの目に好もうみせてくれるは。

イエモ：(なんとしたこと。息子達も父親に釣りこまれてしまうたわい。

モロド：もののふにもこの疫病の斑、肌に浮いておろうぞ。)

クララ：あなた様の戦勝は、なんと誇らしいこと。この喜びに私の心は落ち着きませぬ。仇はたおれました。勝利の冠でおん身をお飾りなさりませ。偉大な英雄。祖

---

(a) 彼は去る。

(b) 兵たちは戦場曲とともに並んで退場。

(c) 彼は父の手に口づけをし、二人の弟たちもこれに続く。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

国の錦でございます。剣に仇討ちはもうお捨てなさいまし。戦の重荷をといて体を伸ばしたも。…わたくしをいつくしんでくださいませし…はて、わらわが目にしてるのは、なんという貴石。…誰がつけている飾りでしょう。…

そうではありませんこと。そなた様の忠義と勇氣は、帝が血をひく皇子だけがそなふもの。その褒美にこれなる榮譽の印を、帝がそなた様に下され給ひける、と。ああ大切なわが背。しかと聞かれたも。おん帝は弟君の背馳と敗北につき、風のたよりをお耳にされるや、わたくしと、このもの達3人をともに朝廷にお召しになりました。おん帝はわたくしどもに、宮殿の一隅をおあてがいになりましたが、帝の御言葉に、人々は私ども皆に、お殿様方や大御領主様だけが得られるような、榮譽とご好意を示さずにはおれなかつたのでござります。おん帝はきっと、あなた様がおいでになって、御褒美をくだされるのに、慈しみ深くあられることのでござりましょう。

ティト：よし、望むものがあるとすれば、それは…

クララ：それはなんでござりましょう。

ティト：死なり。

クララ：死とはいかに。なんと、わたくしめの手足はこの厳しいお言葉に、恐れおのき、打ちしほまることのでござりましょう。死と申されますか、お答へ下さりませ。…どのようにして、死の苦しみが、武勲の勇者の報いとなるのでござりましょう。お答へ下さりませ。何がおん帝のお気にめさぬというのでござりましょう。

ティト：わしの信心じや。

クララ：信心とおっしゃいますと。たれぞそなた様から奪おうというのでしょうか。これこそ、おん帝に新たな命をさしあげたもの、とさえいへるではありませんぬか。恩をわきまへぬお方が、勲の重みをはかり給ふや。キリストのつわもの、かように忠義の代をお払いになるというのでしょうか。

ティト：おん帝は正しくあられる。忘恩の陰り一筋さへそなはしたまはず。主上はわしに良くねぎらい給ふた。わがキリストの勇氣をかけた戦ののち、わしに常世の勝利の為、期を得させ給ふた。

かくも屈しておるとすれば、なんとわしは幸せものであることよ。

わが妻よ、天主がティトスにあむ冠が、よしそなたの氣に召さぬとあらば、宮にいてもよい。わしとて、宮さかることはない。よしわしが天に召さるとも、そなたは宮に居てもよい。

クララ：いやでござります。愛しきウコンドン様、どうか。わらははいかなときでも、墓の中までもお慕い申し上げます。天主の御心にまつらひまする。

マルチ：お父上<sup>(a)</sup>、息子マルチアルが心より望むこの願ひ。なにとぞお聞き入れ下さいませ。父上、母上、そなた様の血がかくも熱くたぎり立ち、天主のために流されるというのでありましたなら、わたくしや弟どもにもご温情を掛けていただきとう存じます。どうかそなた様に先んじて殉教の道をゆかせたまへ。

マッテ：このわたくしめは、この世の勝者たるおふたかたのため、天の城より取るも取り合えず、受難の冠もて、お迎えにあがりましょうぞ。きつとわたしたちの手に、おふたりの冠が載せられているのをご覧になることでしょう。こちらの右手で、わたくしはお父上に戴冠させていただきとう存じます。

シモン：またわたくしもそこにまいます。かくも美しき兄弟のひとそらい、ひとつでも欠くるわけにはまいますまい。

ティト：なんと申す。わが子シモンよ、そなたも死ぬるつもりか。それでは死ぬる恐ろしさは内に芽生えぬと申すか。

シモン：何をものおちすることがございましょう。うら若き内に死ぬことが、わたくしを幸せにしてくれるといふのに。世に多くのものが言ふは、この在世ばかりが祖国ではなし、とぞ。

ティト：これ、よく聞かぐよい。そなたはまだ幼くか弱い。しかし刑吏の手は恐ろしいぞ。奴らは火であぶり、もの断ち落とすことに慣れておる。

シモン：なんと仰せられます。われは天主の為、蛮力を忍ぶに胆勇なり。

ティト：三人の貴い兄弟よ、立つがよい<sup>(b)</sup>。そなたらが天主に捧げた愛と忠誠は、そなたらをこのティトスが息子にふさわしうする、心の本性を告げけり。ああ、なんと美徳がわしを喜ばせてくれること。さても、そなたたちの心に気高い心が眼を覚ましおった。げにこれなるは、母が胸乳よりそなたたちに注ぎ込んだもの。息子たちよ、気をしっかりとたもつがよい。そなたたちを天国へ導く争いにも耐えるべし。よし帝より、われらの教えの上に、過誤の手荒な復讐が雨あられと注がれようとも。また気をつけねばならぬ。帝が御言葉はこのようなものであった。「そちはわしにも他のものにも不快に思われたくはないであらう。若い身を落としたくはないであらう。よいか、とりわけことに、キリストの教えについては口の端にのぼせるでない。この一事忘れるでない。よしそちが、わが国土の神々に勤めをとりやめてしまおうものならば、わしがかように機嫌よくそちをいつくしんでおる、この寵意も失せようぞ。

---

(a) 彼は弟たちとともに、ティトスの足下に伏す。

(b) 彼は子供たちが立ち上がるのを助け、彼らを抱きしめる。

## 『キリスト教信仰における不屈の情熱』

今ここで、ティトスが家がいかなる立場にあるか、とくとわきまへよ」。われ等のおもひキリストの教えにある限り、怒りは何事をもなすであろう、とぞ。

クララ：天よわれ等に味方したまへ。わがティトスを助ける勝利をえさせたもれ。

ティト：妻よ子よ。われらが仇がたおれしことを忘れてはならじ。勝ち鬨をあげて、わしは帰って参った。歡喜と安堵が、勝者の劍によりて、祖国を覆い尽くしけり。帝はわしの手で安心を得給ふた。さても天主にこの広き慈愛と恩寵を感謝いたそう。(主は打ち克ちたもうたゆえ。)

マルチ：主よ、帝のお心を主の御心にそわせたまへ<sup>(a)</sup>。

### 第四場

モロドン、イエモンドン、ツミコンドン。

イエモ：御国心いかが思しめさる。キリストの教えという悪疫が勢いづき、わが国に広まっておる。心得ておいでか。武士がすでにこの毒をすいこんでおる。さらに、これに当てられた童子たちがおり、まだいたいけな年頃であるのに、この病を受け継ぐや、無鉄砲となり、これが教えのためには死をもいとわぬと言ってはばかりぬ。

モロド：きやつらが怒りに身を任せているとあらば、凋落せしめれば、わしの言うことを信じよう。やつらが責め具や刑具に刑吏の姿を見たならば、勇気もさぞやくじけよう。気高き精神もじき子供たちから過ぎて行こうぞ。だがこの一件については口を噤んでおくがよい。一見よ、クララの兄がわれらの方にやってきおった。よいか、わしとそちの間に隠し事があるかと気どられぬよう、用心せい。

ツミコ：これはおのおのがた。いかながなされた。そなたたちばかりでこの城内においでか。

モロド：ご自身何あってこちらへお一人で参られた。お一人で越しになるとはいかなるゆえじゃ。

ツミコ：わしは呼ばれて参った。そして帝のおそばにゆかねばならぬ。お望みを伺わねばならぬのじゃ。

モロド：しばらくおん身はここにおわされましたぞ。

ティトスが帰国で、こちらへ参られることになったのじゃ。

ツミコ：いまそなたはなんと申されたのか。一おん帝そのお方がここにおわされたのと申されるのか。ああなんと。このようなご好意は前代未聞のこと。まことに信じ

---

(a) 彼らは去る。

られぬ。このようなことは、未だ誰にも起こってはおらぬ。

イエモ：まことにそのとおり。だが幾年もの時を思いたされよ。戦の技において、また、まごうかたなき忠義において、そなたの義弟にならびたつ男、勇者がおったか。

モロド：そなたがここにおわさればよかった。帝のおふるまひを見、わが世の勇、そなたの義弟に見えることあらば。

ツミコ：ああ、さようでござるか。そのいずれも後にありましようぞ。

ティトスもまたおん帝の宮城に参内し、ご一緒仕ったと、疑うてはおらぬ。では、ぐずぐずしてはおれぬ。帝の御下命をなそう、わがつとめじゃ。

では皆様方、くれぐれもお体大切に過ごされよ。だがモロドン殿がティトスの健康を願っておるかどうか、わしには大いに疑わしいがのう。よし、そなたの功名心がこれをじっと忍びうると、わしが信じるとしても。お達者で<sup>(a)</sup>。

モロド：なげかわしや。ツミコンドン殿が帝にこの言葉を打ち明けられるのであれば、わしの古き憎しみは明らかにならうぞ。この場で彼奴は、脅しをかけてわしに心得させようとしおった。

イエモ：心配めさるな。あやまてる教えゆえ帝おん身が憎んでおられるかの男、そなたにとってどれほどの害があるというのか。そなたは自らの榮譽にかけて憎しみを宥恕してやることもできようて。憎しみの的は、ティトスがキリストの教え、そのような風聞を広めればよい。

## 第五場

### ヤクイン、前出の者たち。

ヤク：キリスト教の教えと申すか。いかがすれば、そのような言葉がそなたの口の端に上るといふのか。

モロド：あいや、わしのぞむところに達せられけり。ヤクイン殿、とくとお考え下され。キリスト者の将帥ウコンドンめが、公然と神々に向かってあざけりと罵(の)りを言い放っておる。しかも、このはやり病はすでに子にも兵たちにも回っております。思うに、父祖の代にはこれまでに、まことの信教の光を宿しておったというに。

イエモ：あれは御法もそしてわれらが帝も尊んではおりはせぬ。あやつが、脳裏に想ふ神だけに、天界と、俗世の全権を認めておる。神々をあざけり、もはやショウ

---

(a) 彼は去る。

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

グンサマさえ敬ってはおらぬ。

ヤク：帝はこのことをご存知あそばすのか。

モロド：しかり。ウコンドンがキリストの教えに改宗した由、帝が気色をいたくそこなはれける。よし、大将再びわが神々に帰依せざるときは死をもって迫るとおほせらる。帝は顔を彼奴からおそむけになり、不機嫌の態で去りたもうた。

ヤク：帝がお怒りは、彼奴より勇気を奪わなかったのか。

モロド：奴が気位はいや増しけり。わしがおそるはツミコンドン殿も考えを同じゅうされておるのか、と。

イエモ：いかに長く、この悪疫がわれ等が国土を冒さむ。

ヤク：このような災ひはわしの手により、いともたやすく取り除かれたり。わしは帝の侍医なり。その扱いをこころえておる。

モロド：ヤクイン殿、そなたの手により、キリストの教えのすべて凋落するなぞ、まさにそなたによりなされようならば、そなたが功には褒美が賜りましょうぞ。われら一同、ここに手を結ばぬか。

ヤク：十分、それ以上何が要るか。神様へのお勤めはこのわしをして、これなる目的地へ導いてくれよう。そなたら兩人は、帝のもとに参内すべし。またウコンドンが言葉を見出すべし。これを大げさに奏上し、疑念で帝を驚かせたまへ。なれば、その勇なるを知りたまへる拳の主、その忠義をも疑いめさるべし。あたかも、兵ども帝に謀反する逆賊、ティトスが言葉にうなずきおつたと、取り繕うて話せ。わしはその間にいそぎ、シャルンガのもとへ参ろう、これなる男は将とて、また坊主の大名とて、大和が国の聖典とわが帝の国の掟を守護しておる。彼がわしの網にかかり、憤りを覚ゆれば、わしとても帝のもとへ参じ、そなたらが悲嘆のぞわめきに彼が嘆きが重なるように計ろうぞ。さすればこのヤクイン進み出て、最も力強いひと押しを添えようぞ。なれば、ウコンドン、家屋敷、お役目、果ては命まで失うであろう。かくして事は成されるとおり、成就するであろう<sup>(a)</sup>。

モロド：ご同輩。ヤクイン殿。そなたの万策、まことに気に入り申した。ウコンドンもかくしておれぬ。わが仇も落ちぶれようぞ。して、わしがやつめの位階を継ぐことになろうぞ。

イエモ：わしのまなこに映るのは、王座にあってうち輝くそなたの姿。しからば、間をおくでない。いざ勝利を収めむ。

---

(a) 彼は去る。

モロド：帝がももにはせ参じようぞ。

イエモ：おとも仕る<sup>(a)</sup>。

## 第二幕<sup>(b)</sup>

ティトスを罾にかけようとする敵対者の謀事。

### 第一場

ティトス・ウコンドン、クララ、マルチアル、マッテウス、シモン。

キリスト信者たるティトスの一族郎党。

ティト：よいか、永久の世の父、主でおはします神に賛美歌を歌へ。勝利はかの御手によりわれにもたらされしより。息子たち、詞の内容と理解をしかと頭に刻むべし。心が忘れぬよう。キリストの信者たち、賛美の歌を主に献進せよ。

(彼等は珍なる合唱で頌歌を歌う。)

さあ汝等ますらをたちよ、主のみ前で朗らかに歓喜の歌を歌へ。やれそのお方の目配せあらば、つわものさえ、身をふるわせ、逃げゆくほど。

やれさあ男の子たち娘たち、賛美の歌をうたへ。絃うつ音色、頌詩の歌声を皆にきかせよ。

翁たち、母たち、歓喜の響で歌詞をつくれ。勝利の冠にふさはしく、全能の与え手を褒め称へよ。

敵は圧してこようが、実るまい、打ち砕くことなど出来はせぬ。大きな神はわれ等が力われ等がために剣を抜いて戦ってくださるゆえ。

われらが誉、われらが力、主よそれはあなたでございます。おん身のそばにこそ、救ひのたしかなのぞみがございます。

---

(a) 彼らも退場。

(b) 寺院にて。



## 『キリスト教信仰における不屈の情熱』

争う山羊のように、山は歡喜にふるへ、羊のように、丘は跳ねよう、それもおん身が御寛大であらせらるゆえに。

主よ、われらに榮譽はふさはしからず。すべての時代にあつておん身のみ、限りなくおん身をたたえるは、その慈愛ゆえ。

主のみがわれらを心にとどめてくださった。救はんとしてわれらのもとに。かの雷光に仇敵はまろびけり。

あのお方こそ、願う者すべての、港なり、碇なり、戦する者の盾なり、宝冠なり、また報いなり。

主よ、われら争ひより、勝ち戻りけり。主よ、おん身の従者にも永久の天国の冠を授けたまへ。

### 第二場

#### シャルンガ、前出の者たち。

シャル：おお、いとわしき十字架ではないか。これはいかに、このうつけ。そちはこの飾りを神と崇め奉るか。いかにも偉ぶっておるな、ちよろずの神から下された勝利がそちを嘲笑者にしたたか。今や、そちには神々はあまりに物足りぬというか。おお、この十字架をわしはもはや目にはおれぬ<sup>(a)</sup>。

ティト：お待ち下され。

シャル：御免。この木切れは、わが足下に落ちねばならぬ。

ティト：引き下がられよ一悪に染んだ手で、キリスト信者の神聖に触れてはならぬ。わしはわが身を身代わりにして差し出そうぞ。して、子供たちを、伴侶を、家財の全てを。これらはキリスト信仰のため、受難へと用意されたものなり。

シャル：われらが国のちよろずの神をば、悪徳の嘲弄者なるそちは、蔑するつもりか。

ティト：あいや言葉を控えられませい。ちよろずの神などおらぬ。おわしますは

---

(a) 彼は十字架のほうへ進むが、そのつどティトスにさえぎられる。

ただ一つの神。このおかたこそ無辺際の主。

シャル：なれば、釈迦に阿弥陀はもう神ではないと申すか。仏や神様はいずこにおられる。

ティト：むなしき名のみ並ぶこと。それでは、塵芥のほかにも何ものも、まったき神の性を得ぬことよ。

シャル：なんという冒瀆の言葉。そちはげにあつかましくも、ものを見ず、ちよろずの神々について喋りおる。この世にあってかくも善なり、有難くおわしますものを。

ティト：大和の国がこの世の全てであろうか。われ等が知るは、数多の地に人国、河があれば国も数々。これらを扶持すはいずくの神ぞ。

シャル：いずこの人国にも、いずこの地にも、それぞれ神がおわすもの。

ティト：では、そうだとしようぞ。なれば世により大きなるところには、ますます大きなる神がおわすがことわり。そなたたちの神なる釈迦は大きくおわすか、それとも小さくおわすか。日本にしてみれば、たしかに大きゅうあるまい。この帝の国は小さいゆえ、小さい神なり。ああ、なんと釈迦はあわれな神であろうことよ。よしんば、大きい神のいずれか来られたとせよ。そなたが釈迦は去り、釈迦よりほかに何の神も知ることのない、異国の地にて、いたはしき様に入りぬべし。

シャル：神様が争うものか。おわされるところでは分け隔てされず、合い寄り給ふ。

ティト：よかろう。ならば、シャルンガ殿、神とは何と心得る。

シャル：神、のう。この問ひはあまりにもむつかしきことなり。これにつきては、人の考えるも、苦しめて、ことわりをえぬ。神は、その、しかとつかみえぬもの、一全き性を備え給ふ、かしらん。

ティト：ではそれがしの方からすれば、かような次第になりぬべし。よし、ところの違いに応じ、神たちの法力も変わるとせよ。または神が威力も美麗も、そこでは大きく、ここでは小さいと言うなれば、いかにそなたはそれがしと言ひ争へるといふのか。げにこの上なく全き性が、そなたの言う釈迦に備ると申されるか。そは、そなたと同じ、人であり、大和人であったものを。やがて滅ぶる運命にある者よ、そなたは死すべき定めを負った者の足下に、ひれ伏すとは、いかにおろかなことよ。朽ち果てた骨の名残を見ていかにせば、骨壺の中に神の実がこのれり、といへようぞ。よし、そなたが仏を真の神としようものなれば阿弥陀に神様、また釈迦はなんとこのたまうか。これもまた神なりや。この神々はさだめし嘆くことであろうぞ。そのうちのたれかひ

## 『キリスト教信仰における不屈の情熱』

とりだけ、あるいはたれでもなし、最上に全きものでありえようからの。天上天下、いかなるものとして神というものは、智慧、して莊嚴、また威勢において並ぶものはあるまいて。げにその広さ限りなきゆえに。

シャル：げにおろかで味気なく、腹立たしきはこの過てる教えの一式。ならばそちは、大和の神官僧侶どもは嘘偽りを唱えておったと、申すのか。また、このわしは、妄想してそちをたぶらかしておったと、申すのか。

古のときに遡ってみよ。そちのご先祖をとくと見るがよい。それらが人々は、神の中に列せられなんだか。

かように命じてきた、御法や教えは、いかにして守られける。では、重々気をつけられよ。ちよろずの神のお怒りが、そのような侮蔑の報いになって、おん身にふりかからぬよう、そち自らの手であふってはならぬぞよ。

テイト：なんとあわれなこれなる世の神の群じゃ。われに向かっていきり立ち、怒るともかまはぬ。それがしから進んで、わが努めに対する罰として呼ばわってしんぜよう。よしんば、それがしがまことを口にせずというならば、わが行ひは、げに厳しく報いを受くべき。釈迦は眠っておわすのか。一かくも永きにわたって、このあわれな神はいずこにおわす。なにゆえこのわしを打ちつけてをぢなしうせぬ。これはつまり、かくも性あしく、そなたたちの神が出来ておるゆえ。

かの耳には音も聞こへぬ。かの口元は一言も喋れぬ猿に似たり。かの眼は石よりも盲しいておるわ。

して、この怪しの化物が、大和の心柱なりと申すか。なんとかなしき神の作り物か。椰子で出来た形もなき塊が、匠のくろがねが、神にまつるため徴と名と力をそれに授けたもの。

シャル：わが耳に入ったなんと嫌わしい悪罵であろう。謝罪と取り消し求むぞ。わが面前での非を、よしそれがなされぬとあらば、そちが体面を汚した、わが大君がなし給ふことを知るがよい。あらゆる過ちを憎み給ふ、御法の御業を知るがよい。無惨で苦しみおほき死こそ、それが罪となるべし。そちは滅ぶべし。だがおのれのみならず。そはうぬが子、妻は言うに及ばず、家人まで、うぬが苦悶のともづれ、わが仇討ちのいけにへとなりて、うぬが足もとに倒れ伏さむ。そちは友どちが、灼熱の火中にあってもだえつつ死ぬるを見ん。それらが焼き尽くされてのち、番はそちに回ろうて。そちはゆるゆると死にければ、げにいたはし。これをわしは雷にかけて誓はん。ひとたび焼けた空、炎の雨水を降らせ給へば、かの雷鳴大地をゆるがす。かくも、釈迦はまことに神なり、全能なり。

かくも、まことになれば死をもって呪詛されぬ。わしは去ぬぞ。おん帝シヨウグンサマの耳に、かくもあつかましき難癖、釈迦に向けられたる悪罵を打ち明けむ<sup>(a)</sup>。

### 第三場

#### ティトスと一族郎党。

ティト：これ従者どもよ。しばしわれひとりになりたし。この場を明渡せ。また敵が足にふみつけられぬよう。十字架を一目わからぬよう、脇へ寄せよ<sup>(b)</sup>。

おお、クララよ、そなたの心をいまだいくたの心配事が乱れさせ、物おぢさせてはおらぬか、いかに。胸のうちを聞かせよ。かの冷たき死の闇、シャルンガのものすごき怒りに、肝をすえて立ち向かへようか。そなたの心はいかに申しておる。

クララ：わたくしが、打ち明けなければなりませんことは、喜びが、早くも厭はしき気色にかわり、わたくしの胸をいたくゆすぶっておることでござります。心が良しとせぬものを、胸に覚えずにはおきませぬ。

ティト：ああ、吾が子達よ、われらが進まねばならぬ久遠の道、そなたたちには、つらしと思えぬか。父の死が心地まどはせぬか。

マルチ：お父上、たとい憤怒があらゆる垣を打ち破り、わたくしめの命を奪いにこようとも、わたくしどもを分かつことはできますまい。わたくしめは、お父上と並んで死へと走り入りとうございます。

マツト：それがしの小さき心がお父上のものと一つであるごとく、この体もまた、お父上とひとつになりましようぞ。それがしは、お父上の足もとに伏し、両の腕でその膝をわが身にしかとかき抱きとうございます。

シモン：ああ、お父上<sup>(c)</sup>。ただ一つことありて、つとにおそろしう存じます。わがかくも小さき身体、それがしをして苦しうさせ、心もとなくさせつれば、かくも早々と、兄上達が見よがせに勝利の枝高うかかけむところ、辿りつきとうはござりませぬ。それゆえ、かくも伏してお願い申し上げます。われのそばを離れぬよう、とぞ。

もしや、気取られておられるのでは。あまりに物おぢして、刑場に早々と辿りつくことかなわじ、と。なれば、それがしの体を取り給ひ、この小さき体を兄上たちのと

---

(a) 彼は早足に去る。

(b) 彼らは歩み寄り、十字架を持ち去る。

(c) 彼は父の足下に伏す。

## 『キリスト教信仰における不屈の情熱』

ころ、火中に深く投げ入れてくださりませ。火はわが魂の、歩みて天へ通ずる路となりましょうぞ。

ティト：愛しき子よ立つがよい。天主は心を力づけ給ふ。そなたに持久、忍耐、力強さをさづけ給ふ。あな、子らよ。父の心を克己させ、その目的地へとふるい立たせ、美德が気配を一新させるようじゃ。

かけがへなき妻よ、とくと考えよかし。一時の苦しみを過ごせば、久遠の報がつづこう。痛みの後に、とこしえの喜びが訪れむ。

クララ：わがティトス様。子供達には気高き勇氣、そなた様にはわらはの心の思ひが、喜びになっておりましたぞ。おののきて、心もとなきゆえの怒り。さても刑苦をも迎えんとす、わが心の進みに屈しけり。

やや、あれを。ツミコンドンが、わが兄者が、われらが方へ馳せ駆けて来る。雷光のごとく心のまどひが、その顔より出でつつ。

ティト：妻よ、彼が言葉に負けてはならじ。

### 第四場

#### ツミコンドン、前出の者たち。

ツミコ：この愚か者めが、何をいたしておるのじゃ。わが身を憎げに思ふつもりか。在世にあいて、郷国を捨つるつもりか。

妹よ、もっと賢げに物を見よかし。そなたの夫が、もしや、その教えもて彼ともども、そなたを彼の苦境に引き入れておるのではあるまいな。

クララ：兄者、そはな疑い給ひそ。ここに見ゆるはキリストの女なり。兄者は、そなたがいとはしき神を敬いたも。われこそはキリスト教のため、わが国もわが血も、わが命も捧げるつもり。

ツミコ：あな幸うすき妹。わしが兄なりしことを思へ。そなたは、子達も、そなたも、またわしをも、たわぶれごとより作られし、かようなことどもにより、不幸にし給ふかえ。いづくに理やある。

クララ：理こそわれに告げたり。わらはがそなたに従わぬこそ、わが子達を良く育てること也と。そなたが失へば、われらにまことの命がさづけられるのじゃ。無惨がわれらに、死こそがじきにわれらに与えんものを。

わらはがそなたを、われらが得た勝利へと招き入れてしんぜましょう。勝利の前には争ひせねばならぬ、ただそのことを心得たも。

ツミコ：押しふたがれたる五官の、なんととり乱したる様か。わが妹よ。戯れて

ござるか。わが友、ティトスよ。この妹を、そなたを、わしを、子たちをまとめ、力を集めて考えてもみよ。妻がわしが、そなたが、われらがみな。そなたがかように愚かしうあるならば没落しようぞ。反徒の輩は、そなたも退治できようが、おのれに打ち克つことにも努められよ。かりそめに心を偽り、かく申せ。大和人の信仰こそ、わが信心、じゃと。キリストの教えについては、もう何一つ口にするでない。そなたがこれを行うならば国広しといえども、われらが帝をおいて他に、そちに並ぶものなき大きさを得るであろうよ。

ティト：わしはありとあらゆる帝の偉大よりも、さらに偉大になるであろうぞ。キリスト信者に見ゆるまことの信心が、われがいま小者たる世を去りて後、天主が御屋敷にて、このわしにまことの偉大を読みとりさせ給ふものならば、の。

真のキリストの教えには心を偽る隙もござらん。わしは一語たりとも、わが信心から離れはせぬ。わが天主を、心をこめ、声に出して告白しようぞ。そして常にわが主、わが心の救い主と呼ばん。それがしごとき心貧しき者を慈愛もてお救いくださるお方。

ツミコ：これはしたり。さてもこれでは何の諫めもなされなかったのか。よいか、帝おんみずから、わしをして、そなたを諫められておるのじゃ。このご慈愛を、とくと考えられよ。そなたを王座に導く道筋を、愛ゆえに、つけさせ給ふというに。そなたが教えなど、しばしでも口にするでない。父のごとくそなたを慈しんでおられるおん帝がため。そなたをおそばに置かせ給ひ、他の誰にもまして、そなただけにいと厚き御寵愛を寄せ給はんがため。そなたは存じておったろう。そなたが身を入れておる律法が、われらが教えにしたがひ、この国で禁じられておることを。ゆえに、シャルンガも坊主どもも、キリストの教えをしりぞけたのじゃ。

ティト：さてもわれらが、キリスト信者たるを許されず、おん帝もキリストの教えを、耐えがたく思し召さるならば、なにゆえ、死なり惨たる様を宣下したまはぬのか。われらには、奥つ城へと道が開けたり。大和の国も、われらが奥つ城に向かいて開けたり。今やわしはキリスト者として、死と無惨をいざ望まん。では、おん帝のもとへ参ぜよ。してかく申し上げられよ。ティトスはひとりのキリスト者のままなり、と。また彼が妻、子達は同じ熱意に駆られたり、と。われらはみな、ひとつの心、ひとつの意思なり。

マルチ：信じていただきとうございます。わたくしめも父上の御結論に沿いとうございます。そのうえ、父上の御信条から、一步たりとも外れとうはございませんぬ。

マッテ：それがしはたしかに、まだ幼くよわよわしくあれど、獄卒こそは見よ、

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

わが胸が、その痛みに耐えるに十分に大きになりまさりしを。われは喜んで、この弱しき手足を、引き渡そうよ<sup>(a)</sup>。

ツミコ：この信心はなんといふ夢想の物か。たれもが、進んでおのがじじ、愛顧も、血も、わが身の自由も奪わせていようぞ。

第五場

ツミコンドン、ゴモルドン、ヤクイン、モロドン（傍に控えて）。

ツミコ：わが妹の罪が、このわしに打ち付けた悲惨と死。わしは恐れずにはおかぬ。あれが苦悶がわが苦しみを、引き寄せてゆきおるわい。

ゴモル：わが友よ。そなたの義弟は、いずこにおられたか。

ツミコ：これはいかがいたされた。殿ばら、かくも大わらは急ぎに立てて。なにゆえ、またヤクイン殿もかく急ぎ足に、参られたか。

ヤク：わしは、ウコンドン殿に伝へとうて参った。坊主たちの兵ども、奴とその兵卒の帰りを待ち受けておる、とな。

この民どもは怒っておる。眼からは、憤怒、反抗、憎しみに殺気が、ほとぼしり出しておる。キリスト信者たる、かの武人。太刀を抜きて逆らふ者手当たり次第に打ちすへた、とぞ。

ゴモル：ティトスがもとに参られよ。奴に仲裁させむ。ただ、心得ておかれよ、ヤクイン殿が、このたびの証人なりしこと。

ヤク：やれ友よ。参られよ。かの御仁を守らねば。彼の人により、われらが平和を得ん。わが心は、げにそこにある。して、この御仁を守らんがため、わしはかようなことを告げに参った。

ツミコ：ゴモルドン殿、わしと共にティトスがもとに参っては下さらぬか。そなたとは旧知の仲ゆえ、英傑の悲しみも和らげられようから。されば、ヤクイン殿、そなたにはティトスが安泰につき、ご親切たまわり、まことに有難く存じます。

ヤク：いかに友垣。ティトス殿の御無事のため、わしはいかなる時でも、お役に立ちましようぞ。かく申すも、わしにとりて、いともかけがへのなき妹御の安泰のため。

ゴモル：わしが思うに、かのもっとも優れた男である、そなたの義弟。何やら危ふい橋を渡っておられるよう。それではわれらで何か良き忠言をして、この一件を良

---

(a) 彼らは去る。

き方へみちびく算段せん<sup>(a)</sup>。

ヤク：やれ、行きおったわい。これ、モロドン殿、出て参れ。さても、われら二人だけになったぞよ<sup>(b)</sup>。熟慮の計が、思ふまま、図にあたりおったわ。

モロド：そは、いかにてやあらむ。演じられた役を話せ。

ヤク：まずはクシャンガのところへわしは参り、忠言しておいた。かの武人のところへ総大将の苦境、また奴とあまねくキリスト信者に致命の殴打もて脅かす僧侶たちの怒り、二つながら密密に訴え申せ、とな。さらに、わしは新たな計ごとをめぐらすべく、坊主たちの長どものところへまいった。して、わしはティトスが瞞着し、奴の手軍勢を使いして、密かに成就をたくらむ信教の転覆を弁じたてた。長どもにはいかに多くを失ふかを、知らせてやった。あのいまはしきキリストの十字架が、恥も知らで、今や崇めたてまつられておるゆえに、とぞ。まさに、この武士こそは何をはばかることなく、彼が新しき教えを口にし、それというもおん帝がティトスの懲らしめをためらひたまひしばかりに、自慢げにおのが武具を叩ひて見せよ、とぞ。

かようにして、双方に不信と邪推、辛辣と騒動の機運が起こってこようぞ。たつきも口すぎも、教祖たちがもたらす利なれば、坊主もこれを守護せんと気づこうておるわ。しかし、キリストの教えには、かの武人も戦に立とうて。その安泰とティトスが命をおのが身に引き受け、坊主を太刀もて平らげむと、誓ひを立ておる。

かようなことゆえ、衆の中に、蜂起が間もなく起こるであろうぞ。これがため、わしの手で道筋が敷かれてきたゆえに。火の手がひとたび上がろうものなれば、もはや総大将として生きては戻らまい。奴が落着させよう、鎮めようとすれば、奴めがけて坊主の荒々しき武器が、ねらいを定めておるからの。

モロド：これは天晴れ。わしがそなたに、いかに深く感謝しておることか。わが口ではとても言い尽くせぬ。ただ胸のうちにとどまりてある。

では、ティトスが逐はれ、わしが玉座にのぼせられるのだな。これなるわが身以上にふさわしき者が（わしを褒め称えずにはゆめおくまい）、日の本くまなく探したとて、見つかるまいて。

ヤク：じゃが、イエモンズンをわれらが側に引き入れておかねばならぬぞ。

モロド：この者はそのうち、おん帝の近衛ども、いと多勢ではあるが、これと通ずるであろうし、ティトスがいかに不敵にも、先祖の国の信条を捻じ曲げておるか、

---

(a) 彼らは去る。

(b) モロドンが背後から現れる。



『キリスト教信仰における不屈の情熱』

告げることであろうぞ。

これこそはきっと、そなたが申された通り、まさにゴモルドンのおらぬ間に首尾整ってしかるべきもの。

ヤク：げにげに。わしが見るところ、この計りごとは、いとも見事に成就いたそうぞ。さても、雄弁に力を注がねばならぬ。かく申そう。「主上、じきにそなた様の身の上に事が成りましょう」。なれば、われもわがため弁じ入りましょうぞ。

モロド：ではわしと、共に参れ。

(以下3幕、4幕、5幕については次号2005年に掲載予定。)

[Aus dem Theaterprogrammheft (Perioche), 1774:  
„Der Schauplatz ist in der japonischen Haupt- und Residenzstadt  
Meakon. Die Handlung fängt noch vor der Mittagszeit an, und dauert  
bis gegen den Abend. ... Die Musik zum ganzen Trauerspiele ist vom  
Herrn Johann Michael Hayden, hochfürstlichen Konzertmeister.

### **Khristische Japaneser.**

Titus Ukonden ...  
Marzial, der erstgebohrene Sohn ...  
Matthäus, der zweyte Sohn ...  
Simon, der iüngste Sohn ...  
Klara, Titens Ehegmahlinn ...  
Kuxanga, Oberster und Titens Vertrauter ...  
Titens khristische Hausfamilie, die aus Sängern besteht.

### **Heydnische<sup>4</sup> Japaneser.**

Xogunsama<sup>5</sup>, Kaiser ...  
Xarunga, der geistliche Kaiser ...  
Iakuin, des Kaisers Leibarzt ...  
Gomordon, Oberster der kaiserlichen Leibwache ...  
Zmikondon, Klarens Bruder und Liebling des Kaisers ...  
Yemondon, Hofherr und geheimder Rath des Kaisers ...  
Morodon, erster Hofherr und Vertauter des Kaisers ...  
Die kaiserliche Leibwache, Soldaten 150.“]

Es folgt Abdruck der im Salzburger Universitätsarchiv nachgewiesenen  
deutschsprachigen, gedruckten Bühnentextfassung von 1774.

---

4 Im Original „Heynische“ (mit handschriftlicher „d“-Einfügung), nach „Heydnische“  
emendiert.

5 Im Original „Xogunsana“, nach „Xogunsama“ emendiert.

**Der standhafte Eifer im Khristenthume.  
Erster Aufzug. (a)<sup>6</sup>**

**Die Gunst des Kaisers gegen den Titus Ukondonus.  
Erster Auftritt. (b)<sup>7</sup>**

**Xogunsama. Titus Ukondon. Morodon. Yemondon.  
Gomordon. Kuxanga.**

**Titus.** Es lebe Xogunsam, der Sieger seiner Feinde! (c)<sup>8</sup>  
der Himmel schütze ihn zum Heile der Gemeinde! (d)<sup>9</sup>

**Xoguns.** Freund! Xogunsama wünscht dir gleichfalls Glück und Lust,  
Komm Freund! umfange mich! schließ dich in meine Brust!

**Titus.** Herr! ich bin nur dein Knecht; zu groß ist diese Gnade.

**Xoguns.** Du bist mein Freund, kein Knecht: mein Freund im höchsten<sup>10</sup> Grade,  
Der mir am Herze liegt. O! daß ich deine Treu'

Und Liebe gegen mich zu lohnen fähig sey!

**Titus.** Ich habe nur gethan, was die geschwornen Pflichten  
Von mir erfoderten; denn Feinde ganz vernichten

Und Siegen kömmt von mir und dem Gesicke nicht:

Nur Gott, der grosse Gott, der durch den Donner spricht,

Der auf Gestirnen geht, der Welten nach dem Winke

Der schöpferischen Hand erschüttert und durch Schminke

Des Lichtes herrlich macht, der unermeßlich denkt,

Und schreck't und änderet und die Geschöpfe lenkt,

---

6 (a) Der Vorhof. [Ich habe die Klammereinfügungen des Originals aus computerdrucktechnischen Gründen durchnummeriert.]

7 (b) Dem Titus, der mit dem siegprangenden Kriegsheere nach dem Tresen zurück kömmt, geht der Kaiser bis in den Vorhof entgegen.

8 (c) Das Kriegsheer wiederholet diesen Aufruf.

9 Der Kaiser geht auf ihn zu.

10 Im Original: „höchsté“.

Der hat auch dieß gethan, Herr! diesem muß du danken;  
Der theilet Lorber aus und machet Feinde wanken.  
Von seiner Hande kömmt Sieg oder Niederlag'.  
**Xoguns.** Geliebter Ukon! ich kenne diese Waag',  
Worinn der Götter Hand der Menschen Werke prüfet;  
Ich kenne ihre Hand, die voll der Gnade triefet  
Und auf uns Seegen thaut. Die Ehrfurcht ist gerecht,  
Da du von Göttern gut und von dir selbst schlecht  
Gedenkest; man benimmt den Göttern nicht die Ehre,  
Wenn man auch Menschen lob't; sie dienen uns zur Lehre  
Und Wohlfahrt, diese hat die weise Götterhand'  
Als Mitteln unser's Heil's uns Herschern zugesandt.  
Durch grosse Geister wirkt die Gottheit grosse Sachen.  
Doch sage mir, was wird mein Feind, der Bruder, machen?  
Lebt er noch, oder flog die schwarze Seele aus?  
Fiengst du ihn, oder floh der Rasende nach Haus,  
Damit er neue List und neue Völker habe?  
**Titus.** Nein Kaiser! Sorge nicht; er kann in seinem Grabe  
Dir nicht mehr schädlich seyn. Kuxanga! reiche mir  
Zum Zeugnisse das Haupt. (a)<sup>11</sup>

**Xoguns.** Was höre ich von dir? –  
Sprich! ist mein Bruder todt? Wer hat ihn überwunden?  
Durch wessen dapfre Hand' hab ich die Ruh' gefunden?  
**Titus.** Ich war es, der das Blut des Bruders durch den Staal  
Verspritz'te. Kaiser! sieh das Haupt, worauf die Quaal  
Des wilden Geistes sitzt, den ich vom Körper trenn'te,  
Womit die ganze Wuth erstick't zur Hölle renn'te:

---

11 (a) Kuxanga trägt das Haupt des entlebten aufrührischen Bruders sammt der Brustzierde desselbigen in einer Schüssel hervor und zeigt es dem Kaiser, der das Haupt besichtigt und nach einer kurzen Anrede wiederum in die Schüssel leget.

Nun kan sein blinder Stolz dir nicht mehr furchtbar seyn.  
**Xoguns.** Was sehe ich? – Ist itzt mein größter Feind so klein? –  
Es ist des Bruders Haupt. – Ich kann dein wildes Wesen  
Hofärtiger! noch itzt auf blasser Stirne lesen.  
War ich denn ungerecht und grausam wider dich?  
Du Unglückseliger! Dein Elend würde mich  
Betrüben, wenn Du mich vom Reiche zu verstossen  
Nicht wärest angerückt: nun ist dein Blut vergossen.  
Schreib Ungetreuer! schreib dir dieses selbst zu!  
So nämlich hat die Wut des Lasters keine Ruh',  
Sie schlägt den Thäter selbst, – geh Grausamer! Und raube  
Mir Zepter, Reich und Thron! – geh! schlaf in deinem Staube!..  
*Zum Tit.* Freund! wie belohne ich nun würdig deine Treu?  
Da du den Bruder schlägst, stehst du dem Kaiser bey.  
Aus diesem Brudermord', den du hast ausgeübet,  
Entspringt, daß dich mein Herz als einen Bruder liebet:  
Ia! du sollst künftighin mein bester Bruder seyn. (a)<sup>12</sup>  
Komm werther Ukondon! und nimm den Schmuck, den mein  
Unwürd'ger Bruder trug zum Pfande meiner Liebe  
Von meiner eignen Hand'.

**Titus.** Zu groß sind diese Triebe

Der Gnade gegen mich! Herr! du gehst gar zu weit!  
**Xoguns.** Nein Freund! es ist zwar Gunst: allein die Dankbarkeit  
Und deine edle Treu' macht dich so grosser Ehren  
Höchst würdig. Willst du mehr? Du darfst es nur begehren.  
**Titus.** Herr! ich bediene mich der Güte, da du dich  
So gnädig gegen mich erzeigst. Ich schätze mich  
Für den Glückseligsten, wenn ich nach meinen Pflichten  
Kann etwas Nützlichliches für deine Wohlfahrt richten.  
Ich habe ein Gesetz, und dieses flößt mir ein,

---

12 (a) Er nimmt die Brustzierde des Bruders und schmückt damit den Titus.

Dem Kaiser stets getreu bis in den Tod zu seyn.  
Von diesem können mich Geschenke, Tod und Peinen  
Nicht trennen. Herr! befehl, es soll für dich und deinen  
Gesetzen alles Blut aus meinen Adern geh'n.  
**Xoguns.** Sprich also Freund! in was soll deine Bitt' besteh'n?  
**Titus.** Herr! sey dem Khristenvolk' geneig't. –

**Xoguns.** Pfui! welch Bethören!

(Wie schaudert mir das Herz, da ich muß dieses hören!)  
O! wie misfällst du mir! Freund! ein neue Lehr'  
Schickt sich auf unser Reich und Staatsgesetz nicht her.  
Wer uns're Götter schimpft, ist kaiserlicher Gnaden  
Unwürdig. Willst du dir demnach nicht selbstn schaden,  
Schweig nur vom Khristenvolk'! erhole dein Gemüth!  
Begehre nach Vernunft! ich werde deine Bitt'  
Erhören. Willst du mir und ander'n nicht mißfallen,  
Willst du nicht untergeh'n, Freund! o sey nur vor allen  
Vom Khristenthume still. Denk, meine Gunst ist hin,  
Wenn ich gleich noch so gut und dir geneiget bin,  
Sobald du deinen Dienst den Göttern uns'rer Lande  
Entziehst. – wie? du – ein Khrist? – was grosse Schmach und Schande  
Verkleineret hiedurch so einen Mann, wie du!  
Folg' mir, und lauf nicht selbst dem Untergange zu.  
Verstehst du mich? – Bedenk den guten Rath und bitte  
Um etwas besseres. Denk in dem Ehrenschnitte  
Auf dich und dein Geschlecht! – Genug! Ich liebe dich. (a)<sup>13</sup>

## Zweyter Auftritt.

### Die Vorigen.

**Titus.** Ich soll was besseres begehren? – Könnte ich  
Was besseres, als dieß, um was ich bath, begehren?

---

13 Er geht mit seiner Leibwache in den Palast.

**Gomord.** Was zauderst Ukon! am Porte höchster Ehren?

Du weist, das Fürstengunst uns glücklich machen kann:

Versaume nicht die Zeit, da itzt für deinen Kahn

Der Wind so günstig streicht und keine Fluthen toben.

**Titus.** Freund! Du hast recht. Ich muß die gute Gleichniß loben,

Die zwischen Gunst und Wind' von dir ward vorgebracht;

Denn was auf dieser Welt fühlt mehr des Wechels Macht

Und List, als Menschengunst? Der Kaiser selbst empfindet

Den Unbestand und Trieb der Neigungen; er kündet

Mir zwar ein kurzes Glück auf dieser Erden an:

Und stürz't dadurch ein Glück, das ewig dauern kann.

Er denkt für meinen Leib: ich aber für die Seele.

Er denkt sehr gut: allein zu sinnlich.

**Yemond.** (Aus der Kehle (a)<sup>14</sup>)

Des Siegers spricht der Stolz!

**Morod.** Was Unsinn? welche Wuth!

*Zum Tit.* Held! es läßt lasterhaft, wenn man mit kühnem Muth'

der Fürstenhulde trotzt.

**Titus.** Welch Laster? Ich verachte,

Was Gott nicht dulden kann und was mich boshaft machte.

**Morod.** Wie? – boshaft? – sollte dieß vor Göttern boshaft seyn?

Sie rathen uns ja selbst des Fürsten Ehrfurcht ein.

**Yemond.** Befiehlt nicht das Gesetz und uns're Götterlehre,

Daß man den Kaiser so, wie eine Gottheit ehre?

Wie also kömmts, daß dich der Kaiser boshaft macht?

**Titus.** O! dieses Irrgesetz erheb't mit eitler Pracht

Den Menschen bis zum Gott, und nimmt dem wahren Wesen

Die Ehre, die sich Gott für sich hat auserlesen.

**Morod.** (Wie kühn, wie lasterhaft spricht der verwäg'ne Mund!

**Yemond.** Er machet uns den Haß und die Verachtung kund,

---

14 (a) Zum Morodon.

Womit er das Gesetz verfolgt.)

**Gomord.** Freund! erwäge

Wie leicht des Kaisers Gunst durch so verhaßte Weege  
Des Stolzes sich in Zorn und Wuth verkehren kann.  
Gleichgiltig sieht der Fürst nicht die Verachtung an  
Der Götter; denn er ist mit diesen auch verachtet.

**Titus.** Geh mit dem Götterquark', die in sich selbst betrachtet

Nur Menschenwerke sind, die Bosheit, Trug und List

Erdichtet hat. So groß die Zahl der Götter ist,

So klein ist ihre Macht. Ich ford're diese Laffen

Zum Streite wider mich, sie sollen mich nur strafen,

Wenn sie so mächtig sind! Der Kaiser wird von mir

Nicht hören, daß ich sey von meiner Amtsgebühr,

Von meiner Treu und Pflicht und Liebe abgefallen:

Nein! ich verehere ihn, ich liebe ihn vor allen.

Ich weiß nur gar zu wohl, was Gott, was Kaiser ist.

Gott, aus dem unser Geist und alles Wesen fließt,

Gebühr't vor Anderen Gehorsam, Treu und Ehre;

Dem steht die kindliche Anbettung aller Heere

Und Völkerschaften zu: alsdenn folg't auf der Welt

Der Kaiser, der bey uns den ersten Rang erhält.

So schafft es mein Gesetz. Wenn auch der Kaiser wollte,

Daß ich anstatt der Huld den Zorn empfinden sollte:

So wisse, daß mein Blut ihm schon gewidmet sey.

Er strafe, wie er will, ich werde doch die Treu

Nicht brechen; mein Gesetz befiehlt, die Vorgesetzten,

Wenn sie auch sträflich sind, vom Höchsten bis zum Letzten

Zu ehren. Sage es dem Kaiser, meine Treu

Sey unveränderlich; doch setze dieses bey:

Mein Blut, das ich für ihn mit Freude will vergießen,

Dieß wird für mein Gesetz, für Gott noch lieber fließen.

**Gomord.** Mich schmerzet, daß du gar so eigensinnig bist;



Und wundert, daß dein Geist so unerschrocken ist.

**Titus.** Freund! spare deinen Schmerz und laß mir meinen Glauben,  
Den du bewunderest; es stehen nur auf Schrauben  
Schmerz und Bewunderung, die weder mir, noch dir  
Was nützen.

**Gomord.** Dieses ist der Hauptpunkt, welcher mir  
So schmerzlich fällt, daß ich nicht helfen kann. Ich gehe. (a)<sup>15</sup>

**Titus.** Kuxanga!

**Kuxanga.** Was befehlst, o! Feldherr? sieh! ich stehe  
zu deinen Diensten hier.

**Titus.** Sorg', daß der Kriegesmann  
des Sieges edle Frucht, die Ruh', genießen kann. –  
Soldaten! Traget nun den Lorber sammt der Beute  
In eu're Hüten heim: doch keiner überschreite  
Die Ordnung, das Gesetz, den Wohlstand, seine Pflicht.

**Kuxang.** Feldherr! nach deinem Wink' geht alles, zweif'le nicht. (a)<sup>16</sup>

### Dritter Auftritt.

**Titus Ukondon.** Seitwärts zurück **Morodon** und **Yemondon.**

**Klara. Marzial. Matthäus. Simon.**

**Klara.** O bester Eh'gemahl! mein Trost! sey mir willkommen!  
Was Freude! Welche Lust hat mich ganz eingenommen,  
Da ich dich sehen kann!

**Marzial.** O Vater! sey begrüßt! (b)<sup>17</sup>

**Matth.** Mein Vater! wie vergnüg'st du mich!

**Simon.** Ihr Tränen fließ't

Zum Zeichen meiner Treu! O Vater! laß mich wissen,  
Daß du den Simon lieb'st! laß mich die Hande küssen!

---

15 (a) Er geht weg.

16 Die Soldaten treten mit der Feldmusik in der Ordnung ab.

17 (b) Er küsst die Hande, welches auch die zween jüngeren Söhne thun.

**Titus.** O Söhne! werthes Pfand! des Vaters beste Pracht  
Und Zierde! die der Glaub mir lebenswürdig macht.

**Yemond.** (Sieh! auch die Söhne sind vom Vater angestecket!

**Morod.** Vielleicht auch der Soldat mit dieser Sucht beflecket.)

**Klara.** O! wie ruhmwürdig ist dein Sieg! Ich fasse mich  
Vor Freude nicht! der Feind ist todt: nun schmücke dich  
Mit Lorber, grosser Held! des Vaterlandes Zierde!

Wirf Schwert und Rache weg! entwick'le dich der Bürde

Des Krieges! – liebe mich! – Doch! was für Edelstein

Erblicke ich? – von wem soll diese Zierde seyn? –

Nicht wahr? der Kaiser gab dir dieses Ehrenzeichen

Zum Lohne deiner Treu' und Dapferkeit, dergleichen

Nur Prinzen vom Geblüt' der Kaiser eigen sind?

O werther Eh'gemahl! kaum hat der Kaiser Wind

Von seines Brudes Flucht und Niederlag' bekommen,

Hat er mich, denke nur! zu sich nach Hof genommen

Und diese drey zugleich; er wies uns einen Ort

In dem Palaste an; man mußte auf sein Wort,

So, wie nur Könige und grosse Fürsten speisen,

Uns allen solche Ehr' und solchen Dienst erweisen.

Wie huldreich wird er itzt, da du zugegen bist,

In der Belohnung seyn!

**Titus.** Wenn was zu hoffen ist,

So ist es –

**Klara.** Was?

**Titus.** Der Tod.

**Klara.** Der Tod? – ach! meine Glieder

Schlägt dieses harte Wort mit Furcht und Schrecken nieder! –

Der Tod, antwortest du? – Wie, soll die Todespein

Für den erfocht'nen Sieg der Lohn des Helden seyn? –

Sprich, was dem Kaiser doch so sehr misfiel?

**Titus.** Mein Glauben.

**Klara.** Der Glauben? und hierum will man dir dieses rauben.

Was erst dem Kaiser selbst ein neues Leben gab? –

Wiegt der Undankbare so die Verdienste ab?

Bezahl't er so die Treu' der khristlichen Soldaten?

**Titus.** Der Kaiser ist gerecht; er hat nicht einen Schatten

Von der Undankbarkeit: er handelt mit mir gut,

Da er mir nach der Schlacht für meinen Khristenmuth

Gelegenheit verschafft zu einem ew'gen Siege.

Wie glücklich bin ich doch, wenn ich so unterliege!

Gemahlinn! wenn der Kranz, denn Gott für Titen flicht,

Dir nicht gefällt, bleib nur bey Hof. Ich weiche nicht!

Ich gönne dir den Hof, wenn ich den Himmel habe.

**Klara.** Nein! liebster Ukondon! ich werde bis zum Grabe

Dir jederzeit getreu und Gott gehorsam seyn.

**Marzial.** O Vater! (a)<sup>18</sup> stimme nur in diese Bitte ein,

Nach welcher Marzial dein Kind sich herzlich sehnet!

Ach Aeltern! wenn das Blut in euch so heftig brennet

Und für Gott fließen will, ach! so vergönnet mir

Und meinen Brüdern nur diese Gnad', daß wir

Euch auf der Marterbahn' vorlaufen.

**Matthä.** Ich, ich werde

Euch aus der Himmelsburg als Siegern dieser Erde

Mit eu'rer Marterkron' geschwind entgegen geh'n.

Ihr sollet euer'n Kranz in unser'n Händen seh'n.

Mit dieser Rechten hier will ich den Vater krönen!

**Simon.** Und ich bin auch dabey, damit von der so schönen

Und brüderlichen Zahl kein Glied verlohren geht.

**Titus.** Was? du, mein Simon! Du willst sterben? sag', entsteht

Denn keine Todesfurcht in dir?

**Simon.** Was soll ich zagen,

---

18 (a) Er fällt mit seinen Brüdern dem Titus zu Füßen.

Wenn mich der frühe Tod nur glücklich machet? Sagen  
Doch viele, die Welt sey nicht unser Vaterland.  
**Titus.** Mein Kind! du bist zu klein und schwach: des Henkers Hand'  
Ist grausam; denn sie pflegt zu brennen und zu schneiden.  
**Simon.** Ey! Ich bin stark genug, für Gott Gewalt zu leiden.  
**Titus.** Erheb dich edles Drey der Brüder! (a)<sup>19</sup> – Eu're Lieb'  
Und Treue gegen Gott entdecken ienen Trieb  
Des Geistes, welcher euch des Titens würdig machet.  
O! wie ergätzet mich die Tugend! Es erwachet  
Nunmehr der Edelmuth in euch, den in der That  
Die Mutter mit der Milch euch eingeflösset hat.  
O Kinder! fasset euch! seyd standhaft in dem Streite,  
Der euch zum Himmel führ't, wenn von des Kaisers Seite  
Auf uns're Glaubenslehr' des Irrthum's wilde Rach'  
Sich ausgießt. Merket wohl! die Worte, die er sprach,  
Sind diese: Willst du mir und and'rn nicht misfallen,  
Willst du nicht untergeh'n, Freund! o sey nur vor allen  
Vom Khristenthume still! Denk, meine Gunst ist hin,  
Wenn ich gleich noch so gut und dir geneiget bin,  
So bald du deinen Dienst den Göttern uns'rer Lande  
Entziehst. Urtheilet itzt, in was für einem Stande  
Das Haus des Titus sey! die Wuth wird alles thun,  
So lang wir auf der Lehr' des Khristenthum's beruh'n.  
**Klara.** O Himmel steh uns bey! hilf meinen Titus siegen!  
**Titus.** Gemahlinn! Söhne! denk't, daß uns're Feinde liegen;  
Siegprangend keh'rte ich zurtücke, Freud und Ruh'  
Wuchs durch des Siegers Schwert dem Vaterlande zu;  
Der Kaiser hat durch mich die Sicherheit gefunden:  
Nun lasset uns dem HErrn (denn er hat überwunden)  
Für die so grosse Gnad' und Güte dankbar seyn!

---

19 (a) Er hilft ihnen auf und umfängt sie.

**Marzial.** HErr richt' des Kaisers Herz nach deinem Willen ein! (a)<sup>20</sup>

### Vierter Auftritt.

**Morodon. Yemondon. Zmikondon.**

**Yemond.** Freund! wie gefällt es dir? – Siehst du, wie diese Seuche  
Des Khristenthumes reißt und sich in unser'm Reiche  
Verbreitet? Der Soldat hat auch schon dieses Gift  
Gesogen; ia so gar die Kinder, die es trifft,  
Die noch unmündig sind, so bald sie dieses erben,  
Sind keck und pralen sich für diese Lehr' zu sterben.

**Morod.** Laß sie zu grunde geh'n wenn sie in ihrer Wuth  
Verharren! Glaube mir, es weicht gewiß der Muth;  
Es wird der stolze Geist den Kinder'n bald vergehen,  
Wenn sie den Marterzeug und Henker werden sehen. –  
Doch still von dieser Sach! – Sieh! Klarens Bruder geht  
Auf uns zu; hüte dich, daß er es nicht versteht,  
Was zwischen mir und dir als ein Geheimniß bleibet!

**Zmikond.** Wie? Freunde! ihr allein im Hofe hier?

**Morod.** Was treibet

Denn dich allein hieher? warum kömmt du allein?

**Zmikond.** Ich komm' gerufen her und muß beim Kaiser seyn:  
Und hören, was er will.

**Morod.** Kurz war er selbst zugewen;

Des Titus Wiederkunft konnt' ihn hiezu bewegen.

**Zmikond.** Was sagest du? – er selbst der Kaiser, er war hier?  
O! diese Gnade ist ganz unerhör't und schier  
Unglaublich; denn sie ist noch keinem wiederfahren.

**Yemond.** Wahr ist es: aber nimm die Zeit von vielen Jahren,  
Und sage, ob ein Mann, ein Held zu finden sey,  
Der in der Kriegeskunst und unverfälschten Treu'

---

20 (a) Sie gehen fort.

Mit deinem Schwestermann' soll gleich gehalten werden?  
**Morod.** O wärest du doch hier gewesen, die Geberden  
Des Kaisers anzuseh'n und deinen Schwestermann,  
Den Helden uns'rer Zeit zu sprechen!

**Zmikond.** O! es kann  
Dieß alles noch gescheh'n. Ich Zweifel'le nicht, daß eben  
Auch Titus in die Burg des Kaisers sich begeben  
Und ihn begleitet hab'. Ich säume also nicht,  
Und leiste den Befehl' des Kaisers meine Pflicht.  
Indessen lebet wohl, wenn ihr wohl leben könnet!  
Ob aber Morodon den Titus Wohlfahrt gönnet,  
Scheint mir sehr zweifelhaft: doch wenn ich glauben soll,  
Dein Ehrgeitz könne dieß erdulden, lebe wohl! (a)<sup>21</sup>  
**Morod.** Weh' mir! wenn Zmikondon dem Kaiser diese Worte  
Endeck't; mein alter Haß ist kundbar: an dem Orte  
Gab er durch Drohungen mir dieses zu versteh'n.  
**Yemond.** Bekümmere dich nicht! denk nur, wie sollte denn  
Dir dieser schädlich seyn, den wegen falscher Lehre  
Der Kaiser selbst en haßt? Du kannst zu deiner Ehre  
Den Haß entschuldigen; streu nur den Ruf herum,  
Des Hasses Gegenstand sey Titens Khristenthum.

### Fünfter Austritt.

#### Iakuin. Die Vorigen.

**Iakuin.** Was Khristenthum? wie kömmt dieß Wort auf eu're Zungen?  
**Morod.** O! deine Ankunft hat nach meinem Wunsch' gelungen.  
Bedenk nur Iakuin! der Feldherr Ukondon,  
Ein Khrist, spricht öffentlich den Götter'n Spott und Hohn.  
Und dieses Nattergift hat Kinder und Soldaten  
Schon angesteck't. Ich dacht, die ersten Väter hatten

---

21 (a) Er geht fort.

In Iapon bis hierher das wahre Glaubenslicht.

**Yemond.** Er achtet das Gesetz und unser'n Kaiser nicht;

Nur seinen Gott allein, den er in dem Gehirne

Sich malet, räumt er die Vollmacht der Gestirne

Und aller Welten ein, die Götter spöttelt er,

Und ehret nicht einmal den Xogunsama mehr.

**Iakuin.** Weis es der Kaiser?

**Morod.** Ia! es hat ihn sehr verdrossen,

Daß sich hat Ukondon zum Khristenthum' entschlossen.

Er drohete den Tod, wenn sich der Feldherr nicht

Den Göttern wieder stell't. Er wand sein Angesicht

Von ihm und gieng sogleich ganz misvergnüg't von hinnen.

**Iakuin.** Und konnt' ihm dieser Zorn den Muth nicht abgewinnen?

**Morod.** Sein Stolz ward heftiger. Ich fürchte nur allein,

Es möchte Zmikondon auch mit verstanden seyn.

**Yemond.** Wie lang wird diese Pest in unser'n Landen toben?

**Iakuin.** O! dieses Uebel ist durch mich gar leicht gehoben;

Ich bin des Kaisers Arz und weis mit um zu geh'n.

**Morod.** Wenn dieses wird durch dich mein Iakuin! gescheh'n,

Daß alles Khristenthum durch dich gestürzt falle:

Dann soll auch dein Verdienst belohnet seyn; wir alle

Verbinden uns hiezu.

**Iakuin.** Genug was braucht es viel?

Der Götterdienst führ't mich ja selbst auf dieses Ziel.

Ihr zween verfüget euch zum Kaiser und entdecket

Die Worte Ukondons, vergrößer't sie und schrecket

Den Kaiser durch Verdacht. Er Zweif'le an der Treu,

Von dessen Faust er weis, daß selbe dapfer sey.

Erdichtet, der Soldat sey mit den Irrthumsbanden

Zur Aufruhr wieder ihn mit Titen einverstanden.

Ich will indessen schnell zu dem Xarunga geh'n,

Der als das Oberhaupt und Fürst der Ponzien

Iaponens Heiligthum und uns're Reichsgesetze  
Verwah'r't, damit auch er, wenn er durch meine Netze  
Zur Wuth ist aufgebracht, mit mir zum Kaiser läuft,  
Und euer Klaggelärm mit seinen Klagen häuft.  
Dann wird erst Iakuin den stärk'sten Nachdruck geben,  
Und so kömmt Ukondon um Haus und Amt und Leben.  
Vollziehet dieses so, wie es geschehen soll! (a)<sup>22</sup>

**Morod.** O Freund! o Iakuin! dein Rath gefällt mir wohl.  
So fällt ein Ukondon! so muß mein Feind verderben;  
Ich aber seinen Rang und seine Würde erben!

**Yemond.** Mir scheint, ich sehe dich schon glänzend auf dem Thron'.  
Allein verweile nicht und trag den Sieg davon.

**Morod.** Laß uns zum Kaiser geh'n!

**Yemond.** Ich werde dich begleiten. (b)<sup>23</sup>

## **Zweyter Aufzug. (c)<sup>24</sup>**

### **Die heimlichen Nachstellungen der Feinde wider den Titus.**

#### **Erster Auftritt.**

**Titus Ukondon. Klara. Marzial. Matthäus. Simon.**

**Das khristliche Hausvolk des Titus.**

**Titus.** Nun singet Gott dem HErrn, dem Vater ew'ger Zeiten  
Ein Danklied; denn der Sieg kam mir von seiner Hand'.

Ihr Söhne! merket euch den Inhalt und Verstand

Der Worte gut, damit das Herz auch so gedenke.

Ihr Khristen! bringt dem HErrn ein Loblied zum Geschenke.

*Sie singen ein Loblied im fremden Khorthone.*

---

22 (a) Er geht.

23 (b) Sie treten ab.

24 (c) Der Tempel.



『キリスト教信仰における不屈の情熱』

Singet ihr Männer dem HErrn ein munteres Freudenlied!  
Auf dessen Wink der Starke zitteret und entflieht.

\* \* \*

Stimmt ihr Jünglinge und ihr Töchter ein Loblied an!  
Daß man die Zimbeln und euern Lobgesang hören kann.

\* \* \*

Dichtet ihr Gräuse und Mütter auf einen Jubelton!  
Preiset den allmächtigen Geber für die Siegeskron'.

\* \* \*

Es droht vergebens der Feind, zerdrümmeren kann er nicht;  
Der grosse Gott ist uns're Stärke, die für uns ficht.

\* \* \*

Unser Ruhm und uns're Kraft bist du o HErr! allein:  
Bey dir o Gott! Kann des Heiles sich're Hoffnung seyn.

\* \* \*

Die Berge schütteln sich vor Freud', wie Widder in dem Zwist':  
Und die Hügel springen, wie die Schaafe; weil du gütig bist.

\* \* \*

Nicht uns o HErr! gebühret die Ehr, nur dir zu aller Zeit:  
Unendlich ist an dir zu preisen die Barmherzigkeit.

\* \* \*

Nur der HErr war unser ingedenk, der uns zuhilfe kam:  
Vor seinem Blitze straucheln die Feinde zusamm.

\* \* \*

Er ist der Port und Anker aller Hoffenden,  
Der Schild, die Krone und der Lohn der Streitenden.

\* \* \*

HErr! aus dem Streite zogen wir als Sieger davon:  
HErr! gieb deinen Dienern auch die ewige Himmelskron'.

**Zweyter Auftritt.**

**Xarunga. Die Vorigen.**

**Xarung.** O das verhaßte Kreuz! wie? sinnloser Mann!  
Du bettest diesen Tand als eine Gottheit an? –  
Wie stolz doch! machet dich der Sieg zu einem Spötter,  
Der von den Götter'n kam? und itzt sind dir die Götter  
Zu schlecht? – O! dieses Kreuz kann ich nicht länger seh'n! – (a)<sup>25</sup>

**Titus.** Halt ein!

**Xarung.** Nein! dieses Holz muß mir zu grunde geh'n – –

**Titus.** Zurück! – berühre nicht mit lästerischer Hande  
Der Khristen Heiligthum! ich gebe mich zum Pfande,  
Die Kinder, mein Gemahl, mein ganzes Hausgeräth,  
Das für das Khristenthum zur Marter fertig steht.

**Xarung.** Die Götter unser's Reich's du lasterhafter Spötter!  
Verachtest du?

**Titus.** Ach schweig! es giebt ia keine Götter;  
Ein Gott, nur dieser ist der unermeß'ne HErr.

**Xarung.** Sind Xaka, Amida itzt keine Götter mehr?  
Wo bleiben Fotoqui und Kamis? –

**Titus.** Leere Nämen,

Wo Moder, Staub und Nichts die ganze Gottheit nehmen!

**Xarung.** Welch eine Lästerung! du sprichst so frech und blind  
Von Götter'n, die der Welt so gut, so nutzbar sind?

**Titus.** Ist denn Iaponien die ganze Welt? – Wir wissen  
Von vielen Gegenden, von Länder'n, Menschen, Flüssen  
Und Reichen: welcher Gott ist es, der sie erhält?

**Xarung.** Ein iedes Reich und Volk, ein ieder Ort der Welt  
Hat seinen eig'nen Gott.

**Titus.** Wenn dieses ist, so werden  
Auch gröss're Götter seyn für gröss're Theil' auf Erden.

---

25 (a) Er geht auf das Kreuz los, wird aber vom Titus iederzeit abgehalten.

Ist Xaka euer Gott groß, oder ist er klein? –  
Groß für Iaponien kann er gewiß nicht seyn;  
Denn dieses Kaiserthum ist klein: ist er ein kleiner,  
O! welch ein armer Gott ist Xaka; denn kömmt einer  
Der grossen Götter her, dann muß dein Xaka fort.  
Und in das Elend zieh'n an einen fremden Ort,  
Wo man nichts weniger, als einen Xaka kennet.

**Xarung.** Die Götter streiten nicht und bleiben ungetrennet  
Dort, wo sie sind.

**Titus.** Genug. Xarungal Was ist Gott?

**Xarung.** Gott? – Diese Frage ist zu schwer; hier leidet Noth  
Die menschliche Vernunft. – Gott – hat – Vollkommenheiten,  
Die unbegreiflich sind.

**Titus.** Dieß stimm't nach meinen Seyten;  
Wenn nach Zerschiedenheit der Oerter auch die Macht  
Der Götter sich verhält, wenn ihre Kraft und Pracht  
Dort groß, da kleiner ist: wie kannst du mit mir streiten,  
Daß alles Uebermaaß von den Vollkommenheiten  
In deinem Xaka sey, der doch ein Mensch, wie ich,  
Ein Iaponeser war? – Wie thöricht wirfst du dich  
Du Sterblicher! vor dem, der sterblich war, zu Füßen!  
Wie kannst du aus dem Rest' vermorschter Knochen schließen,  
Daß in dem Aschentopf' ein göttlich Wesen sey?  
Legs't du dem Fotoqui die wahre Gottheit bey,  
Was werden Amida, was Kamis, Xaka sagen,  
Wenn sie auch Götter sind? Sie könnten billig klagen;  
Denn keiner, oder nur ein Einziger allein  
Kann die Vollkommenheit im höchsten Grade seyn.  
Mit Gott kann kein Geschöpf im Himmel und auf Erden  
An Weisheit, Heiligkeit und Macht verglichen werden,  
Weil er unendlich ist.

**Xarung.** Wie thöricht, abgeschmack

Und ärgerlich ist doch dieß falsche Lehrgepack!  
Glaubst du, die Priesterschaft in Iapon hab gelogen,  
Und ich, ich hätte dich durch Irrwahn nur betrogen?  
Geh in das Alterthum, schau deine Ahnen an!  
Sprich, waren diese nicht den Göttern zugethan,  
Und wurden sie nicht stets als Götter angebetet?  
Wie würde das Gesetz und ihre Lehr' gerettet,  
Die dieses anbefiehlt? So fasse dich demnach,  
Damit der Götter Zorn nicht wider dich zur Rach'  
Und Strafe solcher Schmach von dir gereizet werde!  
**Titus.** O dieses arme Volk, die Götter dieser Erde!  
Die können wider mich gereizt und zornig seyn!  
Ich selbst rufe sie zur Andung wider mein  
Bestreben; wenn ich nicht die Wahrheit hab gesprochen,  
Dann werde mein Vergeh'n am Schärfesten gerochen! --  
Schläft Xaka? -- Sag', wo ist der arme Gott so lang? --  
Warum denn machet er durch Schläge mir nicht bang? --  
So nämlich, gar so schlecht ist euer Gott beschaffen;  
Sein Ohr hat kein Gehör, sein Mund gleicht einem Affen,  
Der niemals spricht, sein Aug ist blinder als ein Stein:  
Und dieses Unthier soll Iaponens Stütze seyn?  
Was elendes Gezeug der Gottheit, dem von Eichen  
Ein ungeformter Block und Künstlers Staal das Zeichen,  
Den Namen und die Macht zu einer Gottheit gab!  
**Xarung.** Was Greul der Lästerung die ich gehöret hab!  
Bitt ab und wiederuf die Schmach vor meinen Füßen!  
Wenn dieses nicht geschieht, und gleich: dann sollst du wissen,  
Was meine Hoheit kann, die du verletzt hast;  
Was das Gesetz vermag, das allen Irrthum haßt.  
Ein unbarmherziges und schmerzenvolles Sterben  
Soll deine Strafe seyn; du willst und mußst verderben!  
Doch nicht allein: es wird dein Kind, dein Eh'gemahl

Und deine Dienerschaft, ein Mitglied deiner Quaal,  
Ein Opfer meiner Rach' vor dir zu grunde gehen;  
Du mußt sie in der Glut noch ächzend sterben sehen.  
Wenn die verzehret sind, dann kömmt die Reih' an dich;  
Dein Tod soll langsam seyn und hart. Dieß schwöre ich  
Beym Donner, dessen Klaf den Erdenkreis erschütter't,  
Wenn die entbrannte Luft mit Feuerströmmen witter't.  
So wahr ein Xaka Gott und allvermögend ist,  
So wahr ist es, daß du zum Tod' verdammest bist.  
Ich gehe, Xogunsam dem Kaiser den so kecken  
Verwurf, die Lästerung des Xaka zu entdecken. (a)<sup>26</sup>

### Dritter Auftritt.

#### Titus und seine Hausgenossen.

**Titus.** Ihr Diener! Lasset uns auf eine Zeit allein  
Und räumt diesen Ort. Verberget auf den Schein  
Das Kreutz, damit es nicht vom Feind' zertreten werde. (a)<sup>27</sup>  
O Klara! sage mir, ob dir noch keine Heerde  
Der Sorgen deinen Geist verwir't und schüchtern macht?  
Kannst du, erkläre dich, der kalten Todesnacht,  
Xarungens harter Wuth beherzt entgegen gehen?  
Was spricht dein Herz dazu?

**Klara.** Ich muß es eingestehen,  
Die schnelle Aenderung der Freude in Verdruß  
Erschütterte mein Herz, daß es empfinden muß  
Dieß, was der Willen nicht gut heißt.

**Titus.** O meine Knaben!  
Der Weeg der Ewigkeit, den wir zu gehen haben,  
Scheint dieser nicht zu hart? schreck't euch mein Sterben nicht?

---

26 (a) Er geht schnell weg.

27 (a) Sie gehen und nehmen das Kreutz mit sich.

**Marzial.** Mein Vater! wenn die Wuth auch alle Schranken bricht,  
Und mir das Leben nimmt, wird sie uns doch nicht trennen,  
Ich werde in den Tod an deiner Seite rennen.

**Matth.** So wie mein kleines Herz mit deinem eines ist,  
So wird auch dieser Leib, eh' du getödtet bist,  
Mit deinem einer seyn; ich will bey deinen Füßen  
Mit beyden Armen mich an deine Schenkel schließen.

**Simon.** O Vater! (b)<sup>28</sup> Eines ist, das ich befürchten muß;  
Mein gar so kleiner Leib, der machet mir Verdruß  
Und Angst, ich möchte nicht so bald dorthin gelangen,  
Wo meine Brüder schon mit Lorberzweigen prangen:  
Deßhalben bitte ich fußfällig, steh mir bey!  
Und merkest du vielleicht, daß ich zu furchtsam sey,  
Daß ich den Marterplatz nicht schnell genug erreiche,  
Dann nimm mich bey der Hand' und wirf die kleine Leiche  
Zu ihrem Brüderpaar' ins Feuer tief hinein,  
Das meiner Seele wird der Weeg zum Himmel seyn.

**Titus.** Steh auf geliebtes Kind! Gott wird den Geist beleben,  
Und dir Standhaftigkeit, Geduld und Stärke geben.  
O Söhne! wie erquickt die Tugend, die den Geist  
Des Vaters über sich zu seinem Ziele reißt!

Denk werthes Eh'gemahl! es folg't auf kurzes Leiden  
Der Lohn der Ewigkeit, auf Schmerzen ew'ge Freuden.

**Klara.** Mein Titus! wie ergätz't der Kinder edler Muth  
Und deiner mein Gemüth! des Schreckens bange Wuth  
Ist nun dem Herzenstrieb' zur Marther unterlegen.  
Doch sieh! Der Zmikondon, mein Bruder läuft entgegen,  
Und die Verwirrung blitz't aus seinem Angesich't.

**Titus.** O Eh'gemahlinn weich nur seinen Worten nicht!

---

28 (b) Er fällt ihm zu Füßen.

### Vierter Auftritt.

#### Zmikondon. Die Vorigen.

**Zmikond.** Du Thörichte! was thust? willst du dich selbst hassen?

Willst du, des Lebens satt, das Vaterland verlassen?

O Schwester! sey doch klug! stürz't dich dein Eh'gemahl

Vieleicht durch seine Lehr' mit sich in seine Quaal'?

**Klara.** Mein Bruder! zweifle nicht! sieh eine Khristinn! ehre

Nur deinen Göttergrew! ich gebe für die Lehre

Des Khristenthum's mein Land, mein Blut, mein Leben hin.

**Zmikond.** Du Unglückselige! denk, daß ich Bruder bin.

Willst du die Kinder, dich und mich durch solche Sachen,

Die ein sinnloser Witz erfand, unglücklich machen!

Wo bleibt denn die Vernunft?

**Klara.** O! diese saget mir,

Daß ich die Kinder gut erhalte, wenn ich dir

Nicht folge. Dein Verlurst bringt uns das wahre Leben,

Das uns das Elend kann, der Tod noch bald geben.

Ich lade dich zum Sieg', um den wir fechten, ein:

Doch wisse, vor dem Sieg' muß es gestritten seyn.

**Zmikond.** Welch ein verwirrtes Bild der übertäubten Sinne

O Schwester! spielt mit dir? Ach Titus, Freund! gewinne

Die Schwester, dich und mich, die Söhne; denk, dein Kind,

Gemahlinn, ich und du, daß wir verlohren sind,

Wenn du so thöricht bist. Aufrührer kannst du schlagen;

Nun trachte, über dich auch einen Sieg zu wagen.

Verstelle dich und sag', Iaponens Glauben sey

Dein Glauben; bring nichts mehr vom Khristenthume bey:

Und wenn du dieses thust, bist du im ganzen Reiche

So groß, daß Niemand dir nach unser'm Kaiser gleiche.

**Titus.** Ich werde größer seyn, als alle Kaiser sind,

Wenn mich der wahre Glaub, den man bey Khristen findt,

Nach der verlass'nen Welt, wo ich bin klein gewesen,

Im Hause Gottes läßt die wahre Grösse lesen.  
Verstellung hat nicht Platz im wahren Khristenthum':  
Ich stehe nicht ein Wort von meinem Glauben um;  
Ich werde meinen Gott mit Herz und Mund bekennen,  
Und ihn stets meinen HErrn und Seligmacher nennen,  
Der mich Unwürdigen aus Lieb' erlöset hat.  
**Zmikond.** Beym Donner! findet denn gar keine Wahrung statt?  
Denk doch, der Kaiser selbst läßt dich durch mich ermahnen.  
Erwäge diese Lieb! sie such't den Weeg zu bahnen,  
Der dich zum Throne führ't. Schweig doch von deiner Lehr'  
Auf eine kurze Zeit, damit der Kaiser, der  
Dich wie ein Vater lieb't, dich bey sich haben könne,  
Und dir die höchste Gunst vor allen Ander'n gönne;  
Du weist ia, dieß Gesetz, dem du ergeben bist,  
Daß es nach uns'rer Lehr' im Reich' verbothen ist;  
Xarunga und das Volk der Ponzien verwerfen  
Das Khristenthum.

**Titus.** Wenn wir nicht Khristen bleiben dürfen,  
Und wenn kein Khristenthum der Kaiser dulden kann,  
Warum befiehlt er nicht Tod oder Elend an!  
Zum Grabe ist ia Platz und Iapon steht uns offen:  
Ich will itzt als ein Khrist Tod oder Elend hoffen.  
Nun geh zum Kaiser hin und sage: Titus bleibt  
Ein Khrist, und sein Gemahl und seine Kinder treibt  
Ein gleicher Eifer an, wir sind ein Herz, ein Willen.

**Marzial.** Ich werde, glaube mir, des Vaters Schluß erfüllen  
Und von der Glaubenslehr' des Vaters keinen Tritt  
Abweichen.

**Matth.** O! für die wird mir ein ieder Schritt'  
Ins Elend angenehm! gleich itzt, itzt will ich gehen!

**Simon.** Ich bin zwar klein und schwach: doch wird der Henker sehen,  
Daß mein Herz groß genug zu seinen Peinen sey,



Ich gebe ihm mit Lust die schwachen Glieder frey. (a)<sup>29</sup>

**Zmikond.** Welch ein Phantasten Werk ist doch um diesen Glauben!

Ein ieder will sich selbst Gunst, Blut und Freyheit rauben!

### Fünfter Auftritt.

**Zmikondon. Gomordon. Iakuin. Morodon *seitwärts.***

**Zmikond.** Wie billig fürchte ich das Elend und den Tod!

Den meiner Schwester Schuld mir schmiedet! ihre Noth

Zieht meine auch nach sich.

**Gomord.** Freund! wo verweilet

Dein Schwager?

**Zmikond.** Was ist dieß, daß ihr so heftig eilet?

Warum kömmt Iakuin so schnell gelaufen her?

**Iakuin.** Ich wollte Ukondon berichten, daß ein Heer

Der Ponzien auf ihn und seine Krieger lauer't.

Es wüthet dieses Volk und aus den Augen schauer't

Zorn, Aufruhr, Haß und Mord: der Kriegsmann, als ein Khrist,

Zog seinen Staal und schlägt, was ihm zu wider ist.

**Gomord.** Geh doch zum Titus hin, damit er Frieden mache;

Denn wisse, Iakuin ist Zeug von dieser Sache.

**Iakuin.** O Freunde! gehet doch! erhaltet diesen Mann

Und durch ihn uns're Ruh'; denn mir liegt viel daran,

Und dieses rede ich, damit ich ihn erhalte.

**Zmikond.** Gomordon! geh mit mir zum Titus, deine alte

Bekantschaft ringeret des Heldens Traurigkeit.

Dir aber Iakuin! für die Gefälligkeit,

Die Titens Wohl betrifft, bleib' ich mit Dank verbunden.

**Iakuin.** O Freund! für Titens Heil steh' ich zu allen Stunden

Zu Diensten; denn es liegt der Schwester Heil daran,

Die mir so schätzbar ist.

---

29 (a) Sie gehen fort.

**Gomord.** Mir scheint, der beste Mann,  
Dein Schwager läuft Gefahr: komm also, laß uns denken,  
Wie wir durch guten Rath die Sache besser lenken. (a)<sup>30</sup>  
**Iakuin.** Sie gehen. – Morodon! nun sind wir ganz allein. (b)<sup>31</sup>  
Die ausgedachte List traf nach dem Wunsche ein.  
**Morod.** Und wie? belehre mich von der gespielten Rolle.  
**Iakuin.** Kuxangen gieng ich an und wahrn'te ihn, er solle  
Dem Kriegesmann die Noth des Feldherrn und zugleich  
Die Wuth der Ponzen, die ihm den Todesstreich  
Und allen Khristen droh't, als ein Geheimniß klagen.  
Alsdenn begab ich mich, um neue List zu wagen,  
Zu den Vorsteheren der Ponzen, und trug  
Den Sturz des Glaubens vor, den Titus durch Betrug  
Und durch sein Kriegesvolk such't heimlich auszuführen.  
Ich stellte ihnen vor, wie Vieles sie verlieren,  
Da das verhaßte Kreuz der Khristen ohne Scheu'  
Itzt angebettet wird. Ja der Soldat spricht frey  
Von seiner neuen Lehr' und poch't auf seine Waffen;  
Weil sich der Kaiser scheu't den Titus zubestrafen.  
Hierdurch ward beyderseits Mistrauen und Verdacht,  
Verbitterung und Trieb zur Aufruhr beygebracht.  
Die Ponzen sind besorg't, die Götter zu beschützen;  
Weil sie zum Unterhalt' und ihrer Nahrung nützen:  
Doch für das Khristenthum ficht auch der Kriegesmann,  
Und nimmt sich um sein Heil und um den Titus an  
Und schwöret, mit dem Schwert' die Ponzen zu erlegen.  
So wird sich öffentlich der Aufstand bald erregen;  
Hiezu ist von mir schon der Weeg gebahnet. Bricht  
Das Feuer einmal aus, dann kömmt der Feldherr nicht

---

30 (a) Sie gehen weg.

31 (b) Morodon geht aus dem Hinterhalte hervor.

Lebendig mehr zurück, wenn er will Ruh' verschaffen;  
Denn auf ihn laueren der Ponzen wilde Waffen.

**Morod.** O Freund! was grossen Dank ich dir verbunden sey,  
Fällt meiner Zunge nicht, und nur dem Herze bey.  
So wird der Titus weg, und ich zum Thron' gehoben;  
Denn einen würdiger'n (doch ohne mich zu loben)  
Als ich bin, findet man im ganzen Iapon nicht.

**Iakuin.** Doch Yemondon soll bey uns seyn!

**Morod.** Dieser Spricht

Indessen mit der Wacht des Kaisers, die ihn decket  
Und zahlreich ist, und zeig't, wie Titus sich erkecket,  
Des Vaterlandes Lehr' und Glauben zu verdreh'n.  
Dieß kann am Füglichsten, du weist es, itzt gescheh'n  
In der Abwesenheit Gomordons.

**Iakuin.** Freund! ich merke,  
Die List geht treflich gut! nun brauche alle Stärke  
Der Redekunst und sprich: Nun Herr! wird es mit dir  
Bald gar seyn! Dann werd' ich auch reden.

**Morod.** Geh mit mir!

(Fortsetzung: Aufzug III, IV und V: in Folge II voraussichtlich 2005 in gleicher Zeitschrift. Theaterheft, Huldigungsrede etc. in Folge III)

### Nachwort

Das Japandrama vom *Titus Ukon* wird in Folge III<sup>32</sup> erörtert. Die Frage einer möglichen Aktualität und seine szenische Zusammenfügung seien vorweg skizziert: 1. Die Salzburger Aufführung; 2. Die historische japanische Folie und ihre westliche

---

32 Das Thema beruehren anhand eines anderen Drama, zum ‚Christenfuersten‘ Arima Harunobu 有馬晴信, meine Beitrage (I-IV) in Heft 46 und 47 dieser Zeitschrift, ferner in: Journal of Foreign Language Education and Research, Nr.6, und in: Forum, Kansai Univ., 2004.

Adaption.

(1) Der deutschen Fassung, 1774, liegt eine lateinische von 1770 zugrunde. Zwischen den beiden (einzig) Salzburger Auffuehrungen der Benediktiner Ordensuniversität wechselte der dortige Fuerst-Erbischof: von dem theaterfrohen, eher restaurativen Graf von Schrattenbach zu dem diese Salzburger Buehnentradition bald (1776) einstellenden energischen Aufklaerer Graf von Colloredo. In Abweichungen zur lateinischen Fassung mag man daher, so sehr einerseits Titus im Religionsdisput (II, 2) intolerante und imperialistische Toene der Kirchenherrschaft anschlaegt, andererseits einen ‚Wechselschritt‘ zur Aufklaerung hin heraus hoeren: Ob einleitend nun in einer gerafften Huldigungsrede eine (christlicher) Japanerfigur sich an den Erbischof wendet oder ob abschliessend ein deutlicher artikuliertes religioeses Miteinander: Titus als christlicher „Mitregent“ des aufgeklärten ostindischen Monarchen (Shogun), angesprochen wird. Damit mochte gegen eine intolerante Landespolitik gegen Andersglaeubige – extrem die Salzburger Exulanten-Massnahme gegen Protestanten, 1731/2 – Stellung bezogen sein, möglicherweise auch gegen den Moslam?

Eine weitere Frage mag sein, ob die beiden Benediktiner-Auffuehrungen des japanischen Buehngenres, das eher eine Domaene des Jesuitenordens war, mit dessen Aufhebung im Jahr 1773 in einem Zusammenhang standen, zu dem das Stueck dann eine ordenspolitische Stellungnahme implizieren mochte – oder ob die Zugkraft fuer den pater comicus Reichssiegel vor allem in der jugenderzieherischen Genrewirksamkeit eines christlich-musterhaften japanischen Familien-Martyriums lag.

(2) Ein Blick nach Japan zeigt, dass Reichssiegel Episoden der Christenmission aus mehreren Jahrzehnten zu einer barocken Hofintrige zusammenfuegte. Die Zeit sensationeller Japanmissionsberichte lag ueber 150 Jahre zurueck; doch der Stoff lebte fort, und wir koennen in den Intrigantennamen „Morodon“ schemenhaft noch einen Mori dono 毛利殿 (高政、1559–1628), in „Iakuin“ einen Yakuin Zensho 施薬院全宗 (1526–1597), in dem buddhistischen Disputanten etwa noch einen Asayama Nichijo, (朝山日乗、?–1577, im Religionsdisput vor Oda Nobunaga, 1569), zugleich in der Xarunga-Figur vom barockzeitlichen Tenno 天皇 -Bild („geistlicher Kaiser“) überlagert, ausmachen. In der „Shogun“-Gestalt etwa beruehren sich

『キリスト教信仰における不屈の情熱』

Oda Nobunaga, Toyotomi Hideyoshi und Tokugawa Ieyasu, dies gewissermassen rueckklaeufig, was einen gluecklichen Stueckausgang der Christenmission eroeffnet. Die gewitzte Kontamination von **Titus Bukondonus** (テイトス豊後の殿、erwaeht im Jesuiten-Jahresbericht 1614; eine fiktive Figur?) mit Justus Takayama **Ukondonus** (高山右近殿) zu **Titus Ukondonus** schafft einen christlichen Superhelden.

Die Szene der Martyriumsvorbereitung – ob mit oder ohne *deus ex machina*-Wendung zur Amnestie – war in dem Japan-Buehnengenre haeufig, die Gespraechе dabei zwischen Eltern und Kindern Versatzstuecke. Sie boten sich jugenderzieherisch an: konnte die Ordensschule, bzw. hier: die Ordensuniversitaet, doch gleich drei zentrale Lehrinhalte nachhaltig in eins vermitteln: treu gegen den Landesherrn, folgsam gegen die Eltern und unbeugsam im christlichen Glauben. – Soweit zu Themen der Folge III dieser Arbeit.